



ご主人様と女御主人様と、
睾丸除去されて
黒ギャルになった僕



序章

あたしだって結婚するとは思っていなかったわ。

・・・少し違うわね。

結婚したいと思っていなかった。

誰かと一緒に残りの人生全てを生きるなんて不安。

・・・怖いよ。

だからあたしの希望は生涯独身だったわ。

まあ家同士の、いわば政略結婚の一環みたいなものだし。

「仕方がないか」って半ばあきらめモードでお見合いに行ったら、あいつがいたの。

いい男かどうかは微妙なところだと思ったわ。

それがあいつの第一印象。

でもあいつね。

ちゃんと自分から言ったのよ。

自分がマゾだったこと。

それから・・・、マゾである以上、自分は女性の性の道具でしか無いこともわきまえてるって。

びっくりしたわ。

自分からちゃんと「マゾ」っていう単語を使って告白してくるなんて。

だってそうでしょ？

合コンとかでも普通は、「僕『M』なんですう」なんて軽いノリで言っつて、いじられ待ちを決め込む男がいるけどさ。

本当にマゾだったら、あたしと同じ高さの椅子に座っちゃまずいつてことくらい分かるはずよね？

常に土下座で伏せていて、あたしがトイレから出てきたら便器を舐めて匂い消しをするくらいのが出来て初めて「マゾらしいことは出来ないけど、僕はどっちゃかって言う『M』だと思います」ぐらいの態度なら、分かるけど・・・。

それなのにあいつは自分から、それも家の都合で結婚させられることになったのにも関わらず、二人つきりになった途端自分から「マゾ」告白よ？

もしもあたしがあそこで騒いだりしたらどうするつもりだったのかしら。

録音して公表されたら、あつちの家だって困るだろうに。

あたし、他人向けの仮面をかぶったままでいたから、どうリアクションして良いか分か

らなくなっただけ。

思わず、「あたしは好きよ。そういう男性」って素直に答えちゃったの。

で、・・・結婚しちゃったわけ。

後悔はしていないわ。

むしろ彼には感謝さえしてる。

本当に優れたマゾというものは、女性に感謝の念さえも抱かせるものだもの。

・・・初体験？

それって動物としてのSEXではなくて、そっちの意味での初体験の方？
SMというか、そういう方面での？

そうね。

もう時効だから話してあげるわ。

あたしのそういう意味での初体験は、高校3年の6月くらいだったわ。

あたしは志望大学にいけるかどうかちょっと怪しい感じだね？

パパが家庭教師をつけてくれたの。

あたしは嫌だったわ。

自分一人で出来ると思っていたから。

でもね。

家庭教師・・・そうね、名前は仮に『タマ』ってことにしておいて。

もちろん本名じゃないわ。

彼のキン〇マをあたしが、蹴って潰したの。

だから『タマ』。

タマはね。

初めて会うなりあたしの顔をまじまじと見つめていたわ。

だからあたし、叱責してあげたの。

「いくら年下でも、失礼じゃなくって？」

って思いつきり睨みながらね。

そしたらタマは、すぐに土下座したわ。

でね。

綺麗に三つ指をついてから、きちんと整えられた眉も床に擦り付けてきちんと落ち着

いた声であたしにこう返事をしたの。

「真弓子（まゆこ）様。

お初、お目にかかります。

マノの家庭教師『タマ』と申します。

真弓子様の志望大学である慶法大学に通わせていただいております。

真弓子様の大学進学を最大限お支え申し上げます。

どうぞ、道具と思ってお使いください」

「はあ？ 道具？」

「はい。

マノは女性のための道具でしかございません。

いかようにも使える道具としてお考え下さい」
「ふん。」

それなら、口を開けなさい。

試しにゴミ箱として使ってみるから」

「はい。ありがとうございます」

タマは恭しく見えるように、できるだけあたしに敬意を払ってゆっくりと顔を上げたわ。目には敬意と畏怖がありありと写っていたしね。

あたしは勉強机の引き出しの隅に溜まっているホコリをつまんで、タマの鼻先に近づけたの。

そしたらね？

タマは食べたのよ。

こぼさないように両手を添えて。

それだけで気に入ったわ。

それから、あたしは「まだ信用ならない」とか何とか言ってタバコに火をつけて、

「タマ。灰皿」って命令したの。

本当はもう・・・タマがマゾだって、そして何よりも人間としても信用していたわ。

あんなに大切そうに、大事にあたしの身の回りのホコリを食べるんだもの。

でも、それだけで試験を終わらせたくなかった。

だから、とびきりのいじわるを試してみたかったの。

それが灰皿。

タバコは火が付いていると、600度から850度くらいの熱があるわ。

到底常人が耐えられるレベルじゃない。

だから、どうするかなって思ってた。

タマは、舌をべっつって伸ばしてホコリの時と同じように零さないように両手を自分の顎の下に添えていたわ。

あたしは自分が火照っているのが分かったけど、そういう状況に溺れそうになっている自分を諷めるためにも、思いきってタマの舌にタバコを押し付けたの。

さすがのタマでも、一瞬「ひぐっ！」って舌を引っ込めそうになったわ。

でもそこはちゃんとしている本物のマゾ。

すぐにまた舌を伸ばして、タバコがしっかりと消えるまで耐えていたわ。

まあ、涙がこぼれていたし身体も震えていたから、タマとしても灰皿は初体験だったのかもね。

それからよ。

あたしは成績がぐんぐん上がっていったし、パパはそれを見てどんどん上機嫌になって

いったわ。

お陰でタマはいつ家にも、誰も何も言わなくなった。
だからあたしは四六時中、タマにあたしの世話をさせたの。

トイレから出たら、便器を舐めて匂い消し。

お風呂に入る前は、勃起しないようにチ○コに貞操帯を嵌めてからのパンティーの手洗い選択。
可笑しいのよ。

タマったらパンティーの手洗いさせているだけなのに、貞操帯の中でおち○ちんが爆発しそうになっているの。

苦しくて「ぐっっ」って悶えるのよ。

お風呂から上がったら、全身マッサージ。

勉強中も同じよ。

少しでもあたしがストレスを感じたら即、キン○マを肘でガンガンって叩いてストレス発散♥。

まあ正直言って、成績が伸び悩んでいた時期もあってね。

思わずタマのキン○マを片方、本当に潰しちゃったの。

結局タマはタクシーで病院に向かって、除去手術までしたらしいわ。

でもそのお蔭であたしは勉強に集中できた。

嫌なことがあったら、タマが受け止めてくれる。

そう思ったら怖いものがなくなったの。

もちろんその後タマは変わりなく、誠心誠意仕えてくれたわ。

お陰で大学は慶法大学よりも上の、東教大学に受かったわ。

パパは狂喜乱舞していたわね。

たかが大学進学ごときで、パーティーまで開いてくれたもの。

でもそのパーティーがいけなかったのよ。

パパはあたしとタマの関係に気がついたらしくってね。

タマをクビにしちゃったの。

今、タマがどうなっているか？

結局、他所の貴婦人にお仕えしているみたいよ。

これがあたしの初めて奴隷を持った時の話。

これがあたしの本当の意味での初恋。

これがあたしの本当の意味での失恋。

キスもセックスもしなかったけど・・・。

あたしはタマを愛していたの。
これがそっちの意味でのあたしの初体験の話。

だからあたしの基準は、基本的にタマよ。
自分から「マゾ」と告白できるかどうか。

自分を女性の道具にしか過ぎない存在だと自己認識できているかどうか。

そして、何があっても仕えてくれるかどうか。

そういう目でマゾを判断するようにしているの。

あたしは。

そういう意味では、あいつ。

今の夫であり、今の奴隷は、初対面でちゃんと自分から「マゾ」告白できていたし、まあ合格ってレベルね。

それに次に会った時、つまりお見合いの後の最初のデートで奴隷誓約書を持って来たわ。あたしがあいつの奴隷誓約書で何よりも気に入ったのは、最後の方にあったこの二文かな。

『一、私儀（わたくし）は、ご主人様が望まれるいかなる肉體改造を甘受することを誓います』

『一、私儀は、ご主人様が選ばれた御方に対して、ご主人様と同様にご奉仕し、お仕えることを誓います』

この2つよ。

ここを明文化して書き残すってかなりの勇気がいると思うの。

これだけ医学とコミュニケーションツールが発達している時代で、ね。

どこにでもそういうことが好きな人はいるし、身体どこでも好きな様にいじれる。

そういうアドバンテージも含めて奴隷の誓約を行うってところは、とても好印象よね。

これがあたしに結婚を決意させた瞬間だったわ。

「認めてあげる。」

奴隷誓約書を守っている限り、貴方を自分の所有物だと認めてあげる。

もちろん飽きたら、捨てるけどね」

これがあたしのプロポーズの言葉。

そしてあいつはプロポーズの瞬間、あたしのお尻の穴、つまりアナルを舐めていたわ。あたしね。

夫となる男がマゾなら、あたしがトイレに行った後、肛門を必ず舐めさせるって決めていたの。

夢がかなって何よりだわ。

その日は、相方にビチャビチャの水まみれのうんちだったから、相当に綺麗に舐めないといけないだろうし、匂いもいつもよりハンパじゃなかったはずよ。

必死で喉を鳴らして飲み込んでいたから、のどごしも悪いのね、きつと。

あいつはそれでも飲み込んで、綺麗に指を揃えた三つ指をついたわ。

鼻がひしゃげるくらいに顔を地面にめり込ませながら、

「おいしゅうございました。

女御主人様」

っていうから、ご褒美に頭を踏んであげたの。

・・・

もう分かるでしょう？

タマとあいつの違いを。

パパが口出し手出しできないって所よ。

政略結婚のダシにしたから、まさかパパから破断を申し出るわけにもいかない。

あたしはもちろん、あいつも破断なんて考えてもない。

だから、どんなに変態的なコトをしても。

どんなに背徳的なことをしても。

あたしとあいつは、周囲に祝福される。容認される。

そういう環境が出来上がったの。

だからね。

タマよりも激しく。

厳しく。

強く。

アイツを愛することにしたの。

ちよっと前置きが長すぎたかしらね。

前置きの最後に、あいつの名前を覚えておくわね。

『リン』よ。

名前は家畜人ヤブーの主人公、鱗一郎からとってリン。

仮名？

いいえ。

リンはあたしと結婚した時に、下の名前も変えて『リン』になったの。だから本名よ。

あたしの奴隷の名前は『リン』。

あたしが絶望させ、狂わせ、壊した男の名前。

あたしが精神をすりつぶして、別の奴隷人格を与えたマゾの名前。『リン』よ。

あら、ごめんなさい。

自己紹介が遅れたわね。

あたしの名前は、「真弓子」。

これも本名よ。

あたしたち夫婦だけは本名で通すわ。

だけど他の人は仮名よ。

そこは許して頂戴。

第一章

『一、私儀はご主人様が選ばれた御方に対して、ご主人様と同様にご奉仕し、お仕えることを誓います』

あたしはバーカウンターで、男にリンの誓約書を見せて、そこを指さした。
「これってさ。」

リンが自分から言ってきたことなんだけど、本当だと思う？」

「・・・試してみたら？」

「うん」

あたしはリンを家で待たせて、自分は男と飲み屋でデート。

誤解しないでね。

奴隷はリンだけで十分満足よ。

リンは奴隷として優秀だと思うし、道具としていつも奉仕してくれるわ。

そっち関係は、そっち関係でちゃんと満足しているの。

でもリンって奴隷であっても、男ではないわよね。

男ってさ。

仕事もできて、稼ぎも良くて、話が上手で、それでいて「俺は男だ！」って自信が顔に満ちている人間のことを指すと思うの。

リンはそういう男じゃないわ。

それにリンにはちゃんと「あたしの判断で他人に、リンがマゾだとバラしても良い」って了承をとっているけど・・・、と言うか「いいわね？」って聞いたら嫌そうな顔をしたから、あいつのお尻に剣山を刺したの。それからケツを突き出させて、膝で思いつき蹴りあげたのよ。何度も何度も、何度もね。

最初の一発ですぐにリンは謝罪の言葉を口にしたわ。

でも罰は『すぐには許されない』っていうことを奴隷の頭に刷り込んでおくことが大事だと思うの。

だからまずは、30発。

剣山を押しこむようにひざ蹴りしたわ。

この頃になると、リンは「あぐおお」って悶えていたわね。
でも許さない。

50発目を過ぎた頃かな。

リンが立っていらなくなっていたし、剣山が完全にお尻にめり込だから、許すことにしたわ。

こういうのって抜く時が一番つらいのよね。

だって、もうすぐこの痛みから開放されるって期待しちゃうから。
期待と裏腹の痛みってすごく強く感じるの。

リンを観察するとすごくそれが分かる。

少し抜くと、血がたら～って剣山をつたって床に垂れるよ。

だからしつかり時間をかけてゆっくりゆっくり抜くの。

リンの耳元に吐息を吹きかけながら

『もう二度と反抗的な態度は取りません、女御主人様』って言わないとダメじゃない♥
って囁いたの。

リンの耳のあたりの毛がぞわぞわ～って逆立っていつて、感じているのが分かったわ。
それが妙に愛おしくて、

『もう一回、剣山刺しこんじゃおっかなあ♥』

って言ったら、さすがのリンも辛かったらしく、

『はい。お気の召すまま』

って、あいつ返事したのよ。

もしも『もう許してください』なんて泣き事言ったら、思いっきり刺してあげたのに。
残念♥

まあそういうわけで、リンはあたしの判断でどの誰に「マゾ」だとバラされても仕方の
無い立場なのよ。

ちゃんとあいつの頭の中にも「自分は女御主人様判断でどの誰にマゾだつてバラされても仕方がない」ってことを、痛みと一緒にしつかりと刻み込んでおいてあるしね。

それを踏まえた上で、

『一、私儀はご主人様が選ばれた御方に対して、ご主人様と同様にご奉仕し、お仕えすることを誓います』

って書かれた誓約書を男に見せたの。

『今度見に行っても良い？』

『それってつまり、貴方にも奉仕させたいってこと？』

『違うよ。ただ、見たいだけさ。本当の変態を』

『うん。どうしよつかない』

結婚してまだ時間はそこまで経っていないし、倦怠期なんて微塵も感じない。

だから特別新たな刺激は要らないかもしれない。

だけど、『面白そう！』って思っちゃった。

刺激っていうのはね。

刺すような激しい感情のゆらめきって意味なもの。

タマは刺せなかったけど、リンは刺し殺してみたい。

それってとっても楽しそうじゃない？

あたしはその場では『考えておくわ』って言うておいたけど、内心もう決めていた。呼ぼうって。

あ、ごめんね。

名前を覚えてなかったわね。

あたし、どうしても名前に関して熱意を持ってないのよ。

自分も他人にも。

私の横で飲んでた男の名前は、『瀬知（せち）』よ。

顔がハーフっぽいからセシルって呼んでるけどね。

セシルはビジネス上のパートナー、っていうかあたしの会社のお客様企業の役員。

はつきり言えば現社長の息子だから、ボンボンのお坊ちゃまって言った方が良いかもね。

「ただいま」

あたしが家に帰ると、リンは全裸で玄関の外のタイルの上に直接正座していたわ。

あたしを見た途端、即勃起するのは好印象よね。

仕事帰りに真っ直ぐ帰ってくれば、多分リンの正座の時間は1時間か2時間だったんだろうけど、がつり遅くなったから正味4時間半くらいかしら。リンが正座していた時間は・・・。

「おかえりなさいませ。お仕事お疲れ様でした」

しっかりと綺麗に三指を突いての土下座をしてから、リンはあたしがパンプスを脱ぎやすいように、あたしの靴を両手で抑える。

そして、あたしのパンプスの裏を綺麗に舐めてから

「真弓様の御靴を綺麗にさせて頂き、ありがとうございます」

と、おでこを床につける。

あたしはそれを見てから、お風呂に入るの。

「・・・リンはやっぱりいい子ね♥」

少し調教のレベルを上げても良いわ。

今度の土曜日が良いかしら。

日曜も休みだし・・・」

あたしはお風呂で少し大きめの声で、そう呟く。

お風呂の外で、床に正座してあたしがお風呂からあがるのを待つ奴隷に聞こえるようにね。

セシルには、土曜日に来るようメールを出しておいたの。
もちろん午後から。

朝はゆっくりしたいし。
それに下ごしらえしておきたいのよ。
マノの下ごしらえをね。

これはあたしの趣味なんだけどね。
リンを連れて地下室に連れて行って、ミックスファイトをするの。
知ってた？

ミックスファイトに限らず、戦うって美容と健康に最高ののよ。
カロリーの消費も30分だけで、500キロカロリーもいくし、筋肉が適量だけつくから、綺麗さも保てるの。

だから、あたしはいつもリンと戦っているの。

といつてももちろん、リンは反撃なんてしないわ。

あいつには、「何をしても良いのよ。」って言うてあるけど、絶対に何もしてこない。

いつも内股で殴られるだけ、関節技を極められるだけ。

それがリンのあたしに対するファイティングスタイル。

あたし？

あたしはガッツリ殴るわよ。

顔だろうがキン〇マだろうが、関係なし。

普通プロの格闘技でも禁止されているような肘打ちや、タップしても外さない関節技なんか、当たり前。

結構トレーニングしたから、今ではハイキックが打てるのよ、あたし♥

リンの身体をアザだらけにしてボッコボコにした後、最後はハイキックで一発KO、失神させるのがいつもコース。

普段ならその後、用意させておいた格闘技禁止技特集の本や、ルールブックに載っている、痛そうで、リンを確実に破壊できそうな反則技のコーナーをリンに音読させるの。

あたしはそれを聞きながら、シャワーで汗を流す。

これが毎週土曜日の午前中、必ず行うあたしの趣味。

今日はこれに少し、手を加えようと思うの。

つまり・・・♥

「今日も運動にお付き合いさせていただきありがとうございます。どこまでも真弓子様にお伴しますので、どうか御容赦なく、徹底的に殴り倒して、失神させて下さい。女御主人様」

「遅くなったかしら？」

しっかりと準備体操をしてから、地下室のドアを開けるとね。

リンはいつもの通り、地下室の端っこで土下座していたわ。
ちゃんといつもどおり待っていたみたい。

いつも通り全裸にオープンフィンガーグローブだけ身に着けていたわね。

あたしはって言うのと、ローライズのTバックスポーツ用パンティー（マ○コを見せるのはリンにはちよつと早いからね♥）それに奴隷にマ○コを見せる女御主人様なんじゃないでしょう？）に、プロレス用ブーツ（こっちはあたしの足に傷がつかないようにするためのプロテクターの代わりよ。プロテクターそのものでも良いんだろうけど、あれは可愛くないからダメ）、それからオープンフィンガーグローブ。

この3つだけを身につけて、戦うの。

おっぱいが丸見え？

いいじゃない。

殴られまくるリンへのご褒美代わりよ。

それに奴隷にはマ○コは見せたくないけど、おっぱいぐらいどうってことはないわ。

まあ、リンがそれでズリセンこいているのは知ってるけどね。

・・・

考えてみれば、夫のくせに妻のおっぱいを見てオナニーしてるなんて、最低ね。

でね。

最初はジャブ。

リンはあたしの揺れるおっぱいに視線が釘付けだから、面白いように入るわ。

リンの顔を殴ると、パンパンッて音になるの。

殴るときは、いつも目を殴るイメージで打っているわ。

リンが男だからかもしれないけど、人間の顔って結構硬いのよ。

でも硬い反面、殴るとクビを中心軸にして、ガクンって向こう側にリンの顔が頭ごと吹

っ飛ぶのよ。

で、反動をつけてこっちに戻ってくる。

戻って来るまでに体勢を作っておいて、しっかりと握りこんだ正拳突きをリンの顔に一

発！

これでリンはほとんど動けなくなるわね。

動けなくなったら顔に膝蹴りしても良いし、くの字に曲がっているところに蹴りでもいいわ。

今日のあたしの気分は、リンの耳をつまんで引っ張り上げる。

千切れそうなくらいにね。

ミチミチって音が聞こえるちよつと前にはリンが痛くて顔を上げるから、がら空きのほ

っぺにピンタ！

パーンっ！て音を立てて、（マゾとはいえ）男が転がっていく姿は笑えるわよ。

そうやってリンが寝つ転がったら、顔に乗ってあげて顔面騎乗の状態から、腹パン。これはコツが居るわね。

殴るポイントがあるの。

まず、脇腹は止めておいたほうが無難よ。

特に肋骨のあたり。

理由は簡単。

簡単に折れるのよ。

肋骨って。

あたしが体格的にリンに勝っているからっていう理由だけじゃないわ。

肋骨を折るって本気で殺そうと思ってる人を殴ったら、簡単に折れるのよ。

ましてやどんなことがあっても無防衛、無抵抗のマゾなら超簡単。

簡単過ぎて、折れたってあたしが分からないの。

お陰でリンを3ヶ月も、病院に入れたままだったことがあるわ。

普段家の些事は全部リンの仕事だから、ものすごく面倒で、大変な3ヶ月だったわね。

だから肋骨のあたりは殴らない。

代わりに殴るのはみぞおち。

ここは他の部分よりかなり激しく、悶え苦しむはね。

呼吸ができなくなることもままあるみたい。

そのくらい痛い、良いポイントよ。

ここに上半身の体重を乗せたまま、一気にパンチ。

知ってる？

人体ってみぞおちを殴られると、ぶぼって音がするのよ。

まるで、つまった下水道が一気に流れていくちよっと前の、空気が流れてゆくみたいな

音がね♥

それから、リバー。

みぞおちの向かって左ね。

ここは効くわよ。

一回、リンが「ここだけは許してください」って泣きながら、あたしに懇願してきた事があつたくらいなもの。

もちろん、オネダリは却下っ！

奴隷がオネダリするのは、1000年早いかな。

リバーは念入りに10〜15発。

しっかり叩いておくわ。

リンの唇が紫色になるまで、ね。

で、最後がへその下あたり。

ここはね。

大腸とか、精巣が入っているところなんだけど。

殴ると、ベチャッという水系の音がするのよ。

水袋を殴っているみたいで、現実感がないのが良いわ。

あたしは現実感がなく楽しめて、リンは死ぬほどの痛みを現実感を持って体感できる。

すごく良い関係でしょう？

もう立つこともままならなくなったリンの耳を引っ張って、また立たせたらね。

今度はラッシュ、ラッシュ、ラッシュ！

ミドルキックとか、フックとかが多いかな。

当たった時にリンのリアクションが激しい奴がお気に入りになることが多いわね。

ここで言うリアクションって何も吹っ飛んだりするリンのアクションのことだけをさすわけじゃないわ。

はつきり言えば勃起よ、勃起。

リンにパンツとかを履かせない理由は、あたしの前ではいつもフル勃起が奴隷の義務だと思っているからよ。

当然ボコられている時もフル勃起。

というか、むしろ普段よりも強く勃起して欲しいわね。

あたしとしては。

で、リンがへろへろになつたら、フィニッシュ。

最後はさつきも話した通り、顔面へのハイキックよ。

今日もリンは失神KO。

あたしの最大の大技なもの。

意識くらい吹っ飛んで当然よね。

奴隷ちゃん♥

普段なら、目が覚めるまでリンは絶対安静。

顔を横にして、万一ゲロを吐いても呼吸困難にならないようにしてから、頭の下に枕代わりのタオルを敷くの。

でも今日は違うわ。

さつきも言っただけど、下ごしらえが必要なの。

大丈夫だと思っただけど、さ。

リンは『自分がマゾだったことを他人にバラせたくない』みたいな態度を取っていたことがあるから、もしもセシルがいることに気がいたら、勃起してくれないかもしれないじゃない？

だから、後ろ手に拘束して、足を縄で縛って天井の滑車につないでおく。

すぐにでも吊るせるようにね。

それが済んでから、セシルをあたしの趣味部屋である地下室に入れてあげたの。

セシルは相当に暇だったらしく、タバコを吹かせてリビングで待っていたわ。

お金持ちの家のくせに貧乏揺すりをして、ちょっと顔は怒っていたしね。

「遅えよ」

「あら。そう？」

「ごめんなさい」

「で？」

「もう準備はできているわ」

「ふふ。そうか」

セシルはあたしのおっぱいを見てから下衆に笑ったわ。

ウェーブの掛かった髪を揺らしながら、口角が上がるのを見るとなんだか「男ってやっぱり下衆ね」って思っちゃう。

セシルが入ってくる前にリンは目が覚めたらしく、後ろ手に縛られたまま、可愛く土下座していたわ。

「顔をあげなさい」

あたしはリンの足に縛り付けた縄を掴んでから、リンにその声をかけたの。

「はい。失礼いたしましたま・・・」

リンは顔を上げた瞬間、フリーズしてしまったわ。

それはそうよね。

妻であり、女御主人様であるあたしにボコボコにされて意識を失って・・・。

目が覚めたら、半裸の妻の横に知らない男が立っているんだもの。

しかも妻のおっぱいを揉みながら、ニヤニヤしているんだもの。

誰だって、フリーズするわよね。

「ど・・・どちら様ですか？」

「うん？ 彼？」

「は・・・はい」

リンは声が震えていたし、心の動揺がはっきりと私には分かったわ。

そしてセシルにもそれは伝わっていたでしょうね。

「彼はね。」

あたしの恋人。

奴隷誓約書には、他に男を作っても良いって書いてあるわよね？」

「は、・・・・・・はい。」

その通りです」

「しかも、その御方にはあたし同様に、お仕えするって書いてあるわよねえ？」

「……は、はい。書いて……書いてあります」

「誰が書いたの？」

「……私です」

「誰の誓約書だっけ？」

「……わたくし、奴隷リンの奴隷誓約書です」

「うんうん♥」

「しかも、この間約束したわよね？」

「……え？」

「他の誰かにあたしの判断で貴方がマゾだってバラしても良いって」

「……はい」

「はい、結論」

今日からこのセシルさんにもあたし同様にお仕えしなさい。

いいわね？」

「……う」

案の定というか、なんというか。

リンは肩から手を回して、あたしのおっぱいを揉み扱うセシルがものすごく嫌だったみたい。

奴隷ではなく一人の男として、『むかついた』ってやつね。

まあ分かるわ。

結婚した後も、リンにはしゃぶるところか指一本触れさせていないもの。

あいつに許された最大の贅沢は、あたしの生おっぱいをボコられている間だけ、見れること。

揉むなんて、とんでもない。

絶対にあり得ないことよ。

それなのに、セシルは当然のように。

全く愛もなく。

まるで、ガムを噛むようにあたしのおっぱいを揉んでいるんだもの。

専属奴隷としては、悔しいわよね。

だから、リンの縄を引いたわ。

あいつが逆さ吊りになるようにね。

それから、もう一度聞く。

「今日からこのセシルさんにもあたし同様にお仕えしなさい。

い・い・わ・ね？」

リンの頭があたしの股間よりも下になるように縄を調節すると、ちょうどあたしの肩の

高さにあいつのキン○マがぶら下がっていたわ。

そのことにリンも気がついたみたいで、必死でもがいていたけど、無駄。返事よりも先にもがくことを優先するなんてマゾにあるまじきことだわ。

「えいっ！」

あたしは普段、リンと二人きりなら絶対に口にしないような可愛い、演技をした声でリンのキン○マに肘撃ち。

「グギャっ！」

もちろん一発で終わらせるつもりなんて無いわ。

すぐに次の一発。

「ぐっ！！！」

まだまだ終わりにしたくない。もう一発。

「ぐああっ！！」

タマのこりつとした感触がやんわりとした水袋の感覚になったころリンの鳴き声も変わってきたわ。

多分感覚が麻痺し始めたのね。

「そろそろ認めたら？」

「はあ、はあ、はあ・・・み・・・」

「み？」

「認めます。真弓子様がお望みでしたら、いかなることも認めますう・・・」

あたしはリンのおち○ちんを後ろから引き抜くように、天井に向けて勃起しているか確認する。

ふむ、エライエライ。

バッキバキに勃起しているじゃない♥

あたしはリンの亀頭を手のひらで力任せにこねくりまわして、あの言葉を言わせたわ。

「あたしのお気に入りの言葉聞かせて♥」

「あうっ！ あうっ！ あっひっ！ あ！

ひ、ひとつう、わたすいは、女御主人様が望まれるう・・・いかなる肉体改造を・・・甘受するううう・・・はひいっ！ ひいひいっ！ 甘受することを・・・誓いますうううっ！！！！

ひ、ひとつうううっ！！！！ 女御主人様がああああ！ あっ！ 選ばれたお方にいつ！！！！ 対してもおっ！御主人様同様にこ奉仕いいいっ！！！！ お仕えいたしますうううっ！！！！！！

「はい♥ よく出来ました。えいっ♥」



「はぐおおおおおっ!!!!!!!!!!」

リンに今日最後の「褒美キン〇マ肘打ち。

相当に嬉しかったみたいで、天井向いたままのおち〇ちんからおしっこがピューピュー吹き出していたわ。

きつと失神して膀胱が緩んだのね。

でもマゾだから、失神しても御礼を言いたくておしっこ漏らしたんでしょ♥

「目が覚めたら、自分で舐めて掃除しなさいよね。

あ、さっきのセシルの話、マジだから。

真剣にご奉仕してね。

リンっ♥」

「女御主人様。これは何でございましょうか？」

「うゝん？」

ああ、それ？

リン改造計画第一弾。

お腹とお尻に『NTRマゾ』の文字をタトゥーすることにしたから」

「え・・・そんな・・・」

リンは机の上に全裸で四つん這いになって、見知らぬ女性に刃のついた金属製の道具をお尻にブスブス刺されながら、ワナワナ震える涙目であたしを見た。

「なんでもね。」

セシルが言うには、あたしとセシルが恋仲になったからってリンも浮気しないか心配なんだって。

だから絶対に浮気できないように、お腹とお尻に『NTRマゾ』って彫っておく。これなら安心でしょ？」

「私は・・・浮気なんて・・・しません」

「知ってるわよ」

「じゃ、じゃあ・・・」

「もう一つの理由聞きたい？」

「はい。お願いします。女御主人様」

「そこに彫っておけば、貴方は自分がどういう存在か嫌でも自覚するでしょう？」

それにリンに床オナニーさせたら、お腹にベッチョリ精液が付くでしょう？」

リンが射精できるのは『NTRマゾ』のタトゥーにだけ。

良かったわね。

マゾ冥利に尽きるでしょう？」

「・・・はい」

リンは見知らぬ彫師にお尻に文字を彫られて、今度は下腹部。

へとチ〇コの間にも彫り物。

マゾおち〇ちゃんやアナルを見られて恥ずかしいだろうから、わざわざ女性の彫師さんを探して、特別にお願いしたのよ。

そっちの方が嬉しいだろうと思ってね。

「彫師さん。」

あとどれくらい時間がかかるかしら？」

「そうね・・・」

彫り物自体は簡単だけど、この男は皮膚が弱いみたいね。

1時間半くらいで、作業自体は終わるかな」

「そう。じゃあリン。終わったらここにきてちょうだい。」

あたしはセシルと先に行くから」

あたしはそう言っ、ラブホの地図をリンのそばに置いて彫師に後を任せる。

「待って！ 待って下さいっ！」

何を身体に彫られるか分かって狼狽するリンを置いてあたしは、セシルと一緒に車で出たわ。

こつそりリンの洋服全部車に積み込んだし、ラブホまでは車でも15分はかかる。

全裸でタトゥーまみれのマゾはどうやってラブホまで来るのかしらね♥

まあ、全裸でちゃんと来たららご褒美を上げるつもりよ。

あたしがセシルの上になって激しく、あるいはゆったりと時間をかけてマ○コの肉壁を彼のチ○コでこすっていると、電話が鳴ったの。

「もしもし？ あっ」

『あつ』じゃないわよ。どうすんの？ あのマゾ君。洋服無いつて泣きながら、店出て行ったわよ？」

「ああいいの。放っておいて」

「でも本当に泣いていたわよ。目に涙いっぱい浮かべて・・・。タオルだけでも貸すって言ったんだけど、頑なに拒否されて・・・」

「あいつ断った時、なんて言ってた？」

「真弓子様の基石がどーとか・・・」

「基石じゃなくて、ご意思だと思っわ」

「そーじゃなくて、捕まるわよ？」

「もしもそーなったらあたしが責任持つて迎えに行くわ。」

それより、タトゥーはちゃんと彫れたの？」

「・・・」

ええ、彫れたわ。

貴方のご注文通り、大っきな文字で『NTRマゾ』って。

飾り文字とか、綺麗に彫らないで、マジックで適当に書いたようにでっかくね」

「うふふ。そう♥

満足よ」

「・・・彼ってあれで幸せなの？」

「そうよ。おかしい？」

「・・・」

彫師は黙って電話を切ったわ。

あたしは「うふふ」って笑ってから、セシルにキスをする。
大人のキスよ。

舌が舌を舐めあつて、吐息が混ざって、それでいてマ〇コに肉棒が挿さっている。
それだけで女は幸せ。

女としてのあたしはそれだけで幸せ。

少し熱いくらいに暖かくて、満たされている。

あたし、安い女よね。

こんなことで幸せになれるんだもの・・・。

セックスが一段落して、あたしがセシルにワインをついでいた時よ。

コンコンってドアをノックする音が聞こえたわ。

のぞき穴から見ると、全裸の男が内股で震えていたわ。

よく見た顔よ。

リンだもの。

「もう少しセックスするからそこで待ってなさい」

「あ・・・あの・・・。お願いいたします。決してっ！ 決して女御主人様のお邪魔には
なりませんから・・・入れて下さい・・・」

「うん。どうしよっかなあ」

「お願い・・・です」

リンがここまで食い下がるのは正直初めてかもしれないわね。

タトゥーと全裸お散歩がそんなに応えたのかな。

これからもっと激しくするつもりなのに・・・。

あたしは少し悩んでからドアを開けたわ。

「失礼・・・します」

リンは下を向いたままそろーって入ってきたの。

その態度を見てあたしは直感したわ。

ああ、こいつ。

あたしとセシルが男と女のセックスをしていることを、目の当たりにするのが怖いんだ
な・・・って。

だから教えてあげたの。

「もう終わってるわよ。」

それにちゃんと言いつけ通り、ここまで来れたからご褒美を上げる。

でもその前に、あたしとセシルにタトゥーを見せて頂戴」

リンはセックスが終わっていると聞いて、顔をパアツと明るくしたわ。

今度はリンに後ろを向かせてね。

お尻をこっちに向けて、膝をつかない状態で四つん這い。股の下からリンがこっちを見つめさせるの。

「あはははははははっ！！！！」

「随分でっかく彫ってもらったんだなっ！！！！」

「大きすぎるわよっ！こんなに大きくちや疑いような無いじゃないっ！」

「しかも見ろっ！めちやくちや濃い色で彫られてるぞっ！！！！」

「う・・・うう・・・」

「泣かないで、リン♥」

あたしたちは貴方のことを褒めてるのよ。

良かったわね？

とっても可愛い、マゾらしい身体になれて♥」

あたしが、まるでママが子供をあやすような甘い言葉でリンを宥めると、リンは涙をポロポロこぼしながら、「うんうん」って頷いてくれたわ。

あまりにもそのリンの顔が可愛かったから、あたしはセシルにおねだりして、もう一度セックス。

分かるかしらね。

女はいくつになっても、結婚してもおマ○コがキュンってなる瞬間があるのよ。

・・・

もしかしたらこの瞬間が欲しくて、リンを飼っているのかもしれないわね。

リンの顔が見れるように背面騎乗位でおちんぼをマ○コで咥えながら、リンの泣き顔を見たわ。

胸の奥も、オマンコもキュンキュン反応するリンの泣き顔と、無様なお尻の『NTRマゾ』の文字。

「さあ。ご褒美の時間よ」

あたしはリンに床にうつ伏せにフル勃起したまま寝かせて・・・

あたしたちがセックスを楽しんでいる間、リンには腰を左右に降るよう命令したの。そうよ。

床オナニーしろって意味。

でもリンはああ見えて、ウブだから床オナニーって単語自体知らないかもしれないからね。

でも、ちよつと回りくどい言い方になったけど、リンは理解できたみたい。

その快感も、ベッドの上の男女とベッドの下で奴隷という自分の立ち位置も。

ご褒美は、オナニーしても良いってこと。

おかずはあたしとセシルのセックス音。

さ、言うことがあるでしょう？」

「う・・・真弓子様、セシル様。」

この度はマゾにふさわしいタトゥーをありがとうございます。

これでもう二度と普通の男に戻るなど考えずに、ますますマゾとして精進できます。その上、さらにお二人のセックス横でオナニーさせていただけること心から感謝いたします。

本当に有難うございます。

マゾはマゾらしく、無様に射精いたします」

「はい♥ よく言えました♥」

くっくくく。

お前は誰の奴隷だ？

言ってみろ」

「・・・り、リンは真弓子様とセシル様の共有奴隷でございます」

「おうっ！」

この言葉を聞いてからセシルはかなり激しくあたしを抱いてくれたわ。

自分でもマ○コの中でこぼこぼって精子の音が鳴っているのが分かるくらいにね。

その横の床ではリンが床オナニー（笑）。

可愛かったわよ？

可愛いお尻に『NTRマゾ』の文字がはっきりと彫られていて、それがびよこびよこ左

右に揺れるの（笑）。

その姿は到底男とは言えないけど。

私生活では、勃起は許しているけど射精は基本ダメだから（たまにあえて見逃すこともあるけど・・・）、オナニーさせるとリンったら出すまでが異常に早いよ。

「ふあっ！」

「あっ、あっ、あっ!!!」

あくうん♥

どうしたのお？

リン♥

もう逝っちゃった？

あっ、そこっ！そこよっ！

セシル、もつと突いてっ！

もつとっ！

こすれて痛み持ちいのよっ！

もつとおっ！」

「おらっ！こっかっ！」

「はふううう。

サイッコーよ。

そうそう、リン♥

オマタを試かないで、こつちを向きなさい。

射精したところを見せて・・・♥」

リンは絶対に拭いていないことを証明するために頭の上で両手を組んでこつちを向いてくれたわ。

そこにはね？

『NTRマゾ』のタトゥーの、TとRの部分にガッツリと精液がこびりついていたのよ。

それがとっても可笑しくって・・・。

「これって滲みなの？」

「って何気なくセシルのチ○コに揺られながら聞いたら、リンったら

「ものすごくヒリヒリします」

って（笑）。

「そこがお前の射精する場所な？」

そのNTRマゾの文字が。

女の中なんてあり得ないし、マゾにはティッシュももつたないから。

NTRマゾの文字がお前の射精できる唯一の場所だ。

いいな？」

「は・・・はい。

わかりました。

御主人様

あたしはリンがセシルに言われたことを、頭の中で何度も何度もリフレインしているのが分かったわ。

これは命令ではないわね。

むしろ慈悲とか、許しに近いわ。

NTRマゾだと隠せなくなったシンボルにだけ射精しても良い。

そういう意味合いよ。

リンはそれがどんなに残酷な事実であっても。

御礼と感謝を示さなければならぬ。

心の底から湧き出てくる感謝と御礼の気持ちだね。

マゾの最低限を守れることだけが取り柄のリンは、その場で土下座して

「は、ご慈悲をあ、・・・ありがとうございます」

セシル様。

これから誠心誠意お仕えいたします」

ってちゃんと言えたわ。

少なくともその態度と、誓いにあたしは満足したわね。

結局、とっても良い子に出来たリンにはさらに最上級のご褒美を上げたわ。

それは二人の後処理。

まずはあたしのおマ○コの舐め掃除よ。

ジュルジュルジュルって音を立てながら中身の愛液と精液を吸い取ってくれた時にね。あたし思ったの。

『気持ち悪い』って。

多分女の本能がそう思わせたのね。

せつかくの精液を外に出すことが嫌に感じる。

これって女の本能だと思うわ。

だから後処理は最上級のご褒美の時しかさせないことに今日、決めたわ。それからリンは戸惑っていたみたいだけど、セシルへのお掃除フェラ。

あたしは後処理をあつさりとリンにさせただけ、あたしと違ってね。

セシルは様式美にこだわるみたい。

セシルに限らず男はみんなそうなのかな？

とにかくリンにね。

股ぐりをさせるのよ。

仁王立ちしたセシルの股をくぐって、くぐって。

わざとくぐりにくくするために歩くセシルの後を追わせて、必死で『くぐりたいっ！ 御主人様のお股をくぐって、忠誠を示したいっ！』って態度を取らせてから、土下座させるの。

土下座させて、

『どうかこの奴隷めに御主人様の男根様をお掃除フェラさせて下さい』

って三回言わせてから、舐めさせていたわ。

一回言うだけじゃダメなのよ？

三回。

それもつかえず、ちゃんとやるまで何回でも・・・。

言い淀ったら股くぐりからまた最初からやり直させるの。

しかもその後だってあたしとぜんぜん違うの。

あたしは舐めさせている間、正直『気持ち悪い』って思っても『いい子ね』って言いながらリンの頭を撫でていたけど、セシルはビンタするのよ。

しかも「下手糞っ！」って怒鳴りながら。
やっぱ男手つて必要ね。

家のコトも、マゾの調教も。
ちゃんと厳しく出来るもの。

リンは射精したばかりのチ○ポをめちゃくちゃ小さく縮こませて、（男ってビビるとあんなるの？）震えながら丁寧に舐めていたわ。

「終わったら、あたしとセシルは一緒にお風呂に入って洗いっこ。」

リンは廊下に出させて、頭の上で両手を組ませて立たせておいたわ。

だって、これ以上奴隷がラブラブなカッブルのところにいたら変でしょ？

それにほら。

ラブホって意外と人の出入りが激しいじゃない？

清掃員とか、お客さんとか・・・。

きつとああいいう人達に、『NTRマゾ』のタトゥー見られて、

「うわっ。すごい。マジモンのマゾだ」

とか言われてるんじゃないかしら？

もちろん、床オナニーで出した精液はそのままべっちより垂れたままで立たせたわ。

第3章

あたしとセシルの間でも諍いはあるのよ。

下らないことだけど。

つまりあたしとセシルは、どうリンを肉體改造するかで揉めていたの。

あたしは鞆丸除去して、一生射精できない身体にしたいのよ。

でもセシルは、竿の方を除去して一生、精液はどんどん溜まっていくのに射精できない方が楽しいって言うの。

分かっただけじゃない？

だって竿を切り落としたり、勃起してるかどうか分からないじゃない。

『僕は今、興奮してますう』

っていう心の声が明確に出るのがM男の良いところなのに・・・。

そういうわけで賭けをすることにしたわ。

ルールはリンを全裸で放牧して狩りをするの。

いわゆるマゾ狩りゲームってやつね。

要するに、広～い原っぱで逃げさせて、あたしとセシルが馬に乗って追うのよ。

追って、手持ちの道具で狩るの！

リンが逃げれなくなつて、泣きながら許しを乞うたら終わり。

勝者は、リンに『お許しを』って言わせた方が勝ち。

ただしリンを狩る際に、『お許しを』って言えっ！』って言うのは反則。

それから、最初の一発目でリンが許しを乞うたら面白く無いから、それぞれ最低でも道具でリンを5発以上、痛めつけること。

もちろんこのルールはリンには言っていないわ。

ただ『逃げなさい』って言うだけ。

わざわざこのためだけに北海道まで来たんだから愉しませてもらわないとね♥

「あの・・・私はどうしたら・・・」

「 아이폰をいじったら許さないわよ？」

「あ・・・はい」

リンに首輪をつけて、首輪には 아이폰を結んでおいたわ。

아이폰はズーっと音楽が鳴りっぱなし。

こうしておけばどこに逃げてても一発で分かるでしょう？

しかも 아이폰はGPS機能付きだから、万一見失ってもすぐに分かる♥
もちろん首輪と 아이폰以外は全裸。

見渡す限り無人の草原だから、気にしなくて平気よ。

「良い？ 今からリンと追いかけてこをします♥」

「お・・・追いかけて？」

「そ。」

リンは逃げて逃げて・・・。

もしも逃げ切れたらご褒美をあげるわ。

ただし逃げ切れなかったら・・・」

リンの喉がごくくって鳴ったのをあたしは見逃さなかったわ。

どっちの意味で喉を鳴らしたのかしらね？

逃げ切れたらご褒美の方？

それとも逃げ切れなかったらの方？

多分、後者ね。

ご褒美よりも罰を望む子だから・・・。

「逃げ切れなかったら、この間のタトゥーみたいにリンの肉体改造第二弾だからな？」

「あ・・・う・・・はい。わかりました。セシル様。真弓子様」

「俺達二人が揃っている時は、『御主人様。女御主人様』と呼べ。名前で呼ぶときは俺達のどっちがいない時だけにしろ。いいな？」

「は・・・はい。御主人様・・・」

リンはセシルが本当に苦手みたい。

話しかけられただけで、うつむいて奥歯を噛むもの。

せつかくセシルが話しかけやすいように、呼び方を指定してあげたのに・・・。

まあ分かるわ。

自分が作った奴隷誓約書のせいでと分かっている、妻を恋人にされた苦しみは簡単には消せないわよね？

その心の苦しみをもっと味わって♥

あたしはそういう奴隷の顔が好きなの。

「さてと・・・じゃあ行きなさい。あたしとセシルは10分後にここを出るわ」

「は・・・はい。かしこまりました。女御主人様」

リンを走らせた後、あたしはセシルとお互いの狩り道具を見せ合ったの。

あたしは背中をも砕く、拷問用の一本鞭。

S Mプレイ用じゃないわよ。

本物の拷問用。

すっごく高かったんだから。

でもまあリンの勃起が見れなくなと思ったら、安い安い物だけだね。

セシルはショットガンタイプのエアガン。

「エアガンって痛いのか？」

あたしのシンプルな問いに、セシルはシンプルに応えたわ。

パンっ！

あたし初めて見たんだけど、エアガンって弾はBB弾なのね。

（そういえば子供の頃、弟が持っていたわね。この弾）

セシルの撃った弾痕を見たら、厩舎の木の壁にBB弾がめり込んでいたわ。

正直に言っ、驚いた。

拷問用の鞭も相当だけど、これってものすごく痛いんじゃないかしら。

「連射が出来ない分、威力は強いぜ。鞭と変わらないかもな」

「ふ、ふん」

「じゃあ、行くか？」

「そうね。そろそろ時間だわ」

あたしは馬に乗り込んで、手綱を引く。

GPSはここから、少し北。今も北に向かっている。

「北、北、北。北ってどっちだっけ・・・」

草原が広すぎて、どっちがどっちかわからない。

しまった。

こういう時は動かない方がよいのよね。

そう思っていたら、最初に反応したのはあたしが乗っている馬だったわ。

突然方向を変えて明後日の方を見てるの。

あたしが耳を澄ませて、そっちをじーっと見ていたらね。

リンの声とエアガンの銃声が聞こえたわ。

そしてだんだんエアガンの音が近づいてくるのも分かった。

「来るわね♡」

あたしは馬をぐるっと円を描くように走らせて、右手で鞭の柄を握る。

「あざいいいいいっ！！！！！！！！」

御主人様あああああっ！！！！！！

痛いいいいいいいっ！

痛いよおおおおおおおっ！！！！！！」

リンの声だ♡

あたしは柄にもなく、なぜか嬉しくなっ、

足の裏にゾクゾクしたものを感じたわ。

そして声の主はすぐに、あたしの前に走ってきたの。

「お願いですっ！」

お許しをおおっ！

お許しをおおっ！！！！」

「まだ駄目だ。」

まだ三発目なんだよっ！」

「真弓子様ああああっ！！！！」

リンの泣き声。

リンがあたしに助けを求める声。

すごく好きよ。

大好き。

でも、今のあたしは竿の無いリンを愛する自信がないわ。

だから今は心を鬼にして貴方を打つわね。

あたしに泣きついたのなら、その時は鞆丸の除去手術だけで済むから♥

「ふんっ！」

あたしは思いっきり鞭を振り下ろす。

馬の走る流れに乗って、まるでJ O J O になったような気分がしたわ。

ジョニイの方ね。

憧れることさえままならないヒーローに近づけた快感みたいな爽やかさを、リンをムチ

打つ時に感じたの。

「あざいいいっ！！！！！」

リンは一発鞭打っただけで、転げまわって痛がったわ。

お陰でセシルが後ろからリンを狙っている時間を与えてしまったわね。

でもあたしは、焦らない。

「リン。あたしの馬の右側に来なさい！

今すぐにつ！」

あたしの声にリンは慌てたのか、馬の足元を四つん這いのまま駆けずり回って命令通り

反対側に来たわ。

こうしておけばあたしが壁になってセシルは撃てない。

ぐるっと周回するしか無いの。

その間に、あたしはもう一発。

「ひぎいいいいいっ！！！！！」

後頭部を抱えて転げまわるリンは芋虫みたいだったわ。

アスファルトの上に落ちてしまった芋虫と同じよ。

あたしはそれを見て思わずニヤって笑ってしまったの。

自分でも分かったわ。

とっても嬉しそうな顔をあたしはしているって。

だってリンの目がね。

怯えきっているのに、あたしの目を見て一瞬だけホッとしたようなのが見えたのよ。

セシルじゃこうはいかないわ。

嬉しさを込めて、もう一発。

「はぐううううっ！！！！」

「くそっ！」

おい、リンを動かすなんて反則だぞ！」

「あら。そんなこと決めたっけ？」

「大体リンが全然動かないじゃないかっ！」

これが『狩り』と呼べるのか？」

あ、話してるうちにセシルが回りこんできた。

「そうね。分かったわ。

リンっ！」

走りなさいっ！」

命令よっ！」

「はひひいっ！」

わかりまひあっ！！！！」

必死で走りだしたリンを追うには馬を小走りにさせるだけで十分。

そのくらい馬に乗っている人間とそうでない人間とでは有利不利が出るものよ。

それは同時に、心理的上位関係を表すの。

イギリスだのアメリカだのに、未だに騎馬隊があるのはそういう理由。

警察が市民より上に立たないと、治安が守れないようなところは馬を利用するのね。

「あがああああっ！！！！」

あがっ！」

あがあああああっ！！！！！！」

あたしは下にリンを見下ろしながらそんなことを考えつつ、ムチを振るう。

もちろんヒット。

本当はお尻に当たりたいのだけど、どうしても背中に当たるわね。

あの『NTRマゾ』の文字をめがけて、ムチを振るっているんだけど、ね。



セシルがそう叫ぶと同時にパンという乾いた音が鳴って、リンは地面に転げまわったわ。

改造と加してあるのかしら。

わひい い つ……

もう耐え切れないいつ！

もう無理ですうううつ！

お許しをおおお！

「お許しをおお！」

一瞬セシルの方を向いたら、弾の入ったカートリッジ（これで言い方合ってる？ あたし統なんて映画の中でしか知らないから、あれがカートリッジって呼び方で良いのかわからないの）を変えようとしていたわ。

「お許しを」って言うてるのに弾込めしないといけない理由はただひとつ。

まだ、終わってないからよ。

5発目がね。

でもあたしは次で、5発目。

「ひぎいいいいいい！！！！！！！！」

お許しをっ！

お許しをおおおおつ……」

最後の最後になって、あたしの一発がリンのお尻にヒットしたわ。

リンは片手で後頭部を抑えながら、片手でお尻を抑えて地面に転げまわっていたの。あたしは馬から降りて、リンの頭を撫でてあげたわ。

それからこつちに銃口を向けているセシルに勝鬨をあげる。

「勝ったのはあたしよ！」

銃を下ろしてっ！」

セシルはふーつとため息をついてから、銃を下ろして、大げさに肩をすくめてみせたわ。

厩舎までの帰り。

リンはあたしの馬の後ろを歩かせたわ。

まるで罪人が引き回されているみたいだね。

時折後ろを振り返って見たけど、リンは疲労困憊で体中痙攣だらけなのに、ちゃんと勃起していたわ。

そういう所、可愛いね♥

セシルは狩りで女のあたしに負けたことが相当に悔しかったらしく、ブチブチと文句を言っていたわ。

命令はずるいとか何とかね。

でも勝ったのはあたし。

リンは睾丸無しのNTRマゾに改造します。

ああ、そうそう。

リンの首輪につけたアイフォンからずうっと流れる音楽ね。

何度も聞いたことがあるメロディだけど、なんの曲かずっと分からなくてモヤモヤしていたの。

セシルが教えてくれたわ。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンのアン・ディー・フロイデ。

通称、『第九・歓びの歌』だつて。そういえば年末に演奏されているわね。

最後の最後に歓喜が待っていたっていう曲でしょう？

素敵な曲ね。

第4章 寧丸のないマン

「朝起きたら、寧丸が無くなってるって笑えると思わない？」

帰りの飛行機の中であたしがそう聞くとセシルはクスクスと笑って、

「俺にはするなよ？」

って言ってたわ。

「朝起きたら、二度と射精できない、種なしチ○ポマンになっているの。」

もう子供は残せない。

もう男としては見てもええない。

もう男としての価値がない。

そういう人生も素敵だと思うわ。

奴隷なら・・・ね？」

ファーストクラスの席は隣の席が少し離れているから、ちよつと大声になっちゃう。

スチュワードさんが、「は？」って顔をしていたけど多分平気でしょ。

「そっだなあ。」

それは男としては絶対に嫌だなあ」

あたしとセシルは二人そろってクスクス笑ってしまったわ。

余計にスチュワードさんには怪しまれたでしょうね。

でも、きつと楽しいと思うの。

貨物として運ばれているベツト用トランクの中のリンは、そんなこと微塵も考えていないでしょうからね。

「うわあああああつ!!!!!!」

朝起きたら、リンの叫び声が家中に響いてね。

嫌々起きたの。

朝起こすときは、セシルの朝勃起チ○コにフェラしなさいって前に言ったのに・・・。

あたしは不機嫌なままで、タバコを一服。

「・・・あつ」

朝起きた時すぐの、頭の中のモヤが晴れていって、あたしはようやく思い出す。

昨夜リンを睡眠薬で寝かせて、寧丸の除去手術したんだったわ。

あたしはタバコを吸いながら、自分でも聞いたことのないような嬉しそうな女の子の声で、

「むふふ」

って笑っていたわ。

その声であたしの横に寝ていたセシルが起きたの。
「なんだよ。まだ早いだろ・・・」

セシルとの関係？

セシルとは、リンがあたしたちの仲を公認した日の翌日から一緒に住んでいるわ。
というか、一緒に寝ているし、一緒にお風呂も入るし、一緒に食事もある。
離れるのは仕事でぐらかしならね。
出勤する場所が違うし。

まあ、だからこそ家で会った時は熱く燃えるわ。

リンを土下座させたままその横でキスするし、食事はリンに給仕させて二人で食べさせ
合いつこもするわ。

食後は、二人の趣味の時間。

リンをセシルと二人でポッコポコにするの。

悔しいけど、セシルの方がリンを泣かすのは早いわね。

大抵はセシルがラッシュをかけると失神しちゃうし・・・。

趣味の時間が終わったら、リンにマッサージしてもらうの。

あたしもセシルも、ね。

いい汗かいたら、お風呂よ。

リンにお風呂場の前でタオルを持たせたままお風呂の中でイチャイチャ♥

バカにしないでよね。

高校生の頃から好きな男ができたなら、こうするのが夢だったの。

男の人の筋肉の凹凸が最高に好きなのよ、あたし。

お風呂が終わったら、あたしとセシルはセックスよ。

リンはその日のご奉仕っぷりで、どの程度参加させるか決めてるわね。

一番頑張った時は、セックス中ベッドの脇で床オナニーまで許しているわ。

次が、両手に一杯の水を張ったバケツを持たせて、部屋の壁際で立たせておくの。

見学までは許すけど、オナニーはダメってところね。

ここまではセックス後の、フェラ掃除とマ〇コ吸引もセットで許してる。

次が、あたしたちのセックス中に見学させさせないパターン。

リンの耳にイヤフォンをつけて、剥がせないようにガムテープを貼り付けるの。

イヤフォンの先には以前使ったアイフォン。

そうよ。

もう分かったでしょう？

電話をつなげて、あたしたちのセックス音を聞かせてあげるの。

その間、勃起したりオナニーしないように貞操帯を嵌めておくの。

そうしたら、トイレの紙め掃除。

便器に顔を突っ込んで紙め掃除をさせるのよ。

あとは食器洗いとかもあるわね。

ああ、そうそうっ！

セックス音をきかせながら食事をさせることもあるわ。

あたしとセシルの食べ残しをミキサーにかけて、ドロッドロにしてから便器に垂らしておくの。

紙め紙めしないと食べられないでしょう？

一緒に便器も綺麗になって一石二鳥♥

ここまですごく普通ね。

最後はセックスには一切、参加させないパターンね。

全裸にさせて近所の電柱とか、公園の木とか酔っぱらいがおしっこを引つ掛けシミになっているところであるでしょう？

あそこにドロッドロの残飯をかけてあげて紙めさせるの。

許しがあるまではそこを動くことは許さないわ。

当然ボコボコにした後だから、全身アザだらけだし全裸だからものすごく心細いと思う。でもあたしとセシルがセックスを終えて、許しを与えるまでそこから動くことは絶対に許さない。

아이폰って便利よね。

GPSが付いているから、別の場所に移動したらすぐに分かるし♥

まあリンによると、何回か通行人に見られたらしいけど、お股とお尻の『NTRマン』の文字を見て、皆さん笑ってくださいさそうよ。

しかも納得して、通報しないでいてくれるみたい♥

そういうわけだから、あたしもセシルもセックス後はすぐに寝ちゃって、許しを与えるのは翌朝だけ別に良いよね？

ごめんなさい。

だいぶ話が逸れたわね。

普段のリンの生活をお教える良き機会だと思って・・・。

リンの仕事？

メイドよ。

あたしのハウスマイド。

制服は無し。

全裸で家の仕事をさせているわ。

家で生活するにあたってあたしが少しでもストレスを感じたら、即『セックス中はお外で晒し者の刑』だから必死で働いてくれるわ。

24時間365日、無給で働いてくれるの♥
まあ、普段の話はこんなトコロにしておくわ。

「リンがびっくりしているのよ♥」

「あ？ ああ、そうか。そうだったな」

セシルは「くっくくくつ」と嬉しそうに笑うとあたしのおっぱいを揉んで、

「あいつはこうやって女を感じることはあっても、射精はもう出来ないんだな」

「そうね♥」

その後、あまりにもリンがキャンキャン喚くから、セシルが地下室に連れて行ってポツコポツにして失神させたわ。

お陰であたしは朝食を久しぶりに外で摂る事になっちゃった。

塩分とかカロリーとか気にしてるのに・・・。

あたしが戻ってくると、リンは少し落ち着いたみたいでソファに座るあたしとセシルの前で全裸お詫び土下座することくらいは出来たわね。

でも全然言葉は話せなかったわ。

なんか言ってるんだけど、涙声でリン自信が混乱しまくっているせいで何を言ってるか全然分からないの。

「どうする？ お尻叩きでもして落ち着かせる？」

あたしは指で一本鞭の真似をしながらそう聞いたら、セシルがね。

言うのよ。

「それもいいけどな。

こいつ晒し者にされることが一番の罰になるんだろ？」

「？」

ええ、そうよ。

ねえ？ リン♥」

「ひっく・・・ひっく・・・これじゃあ・・・もう・・・ひっく・・・」

「返事をしろよ」

「ひっく・・・だって・・・ひっく・・・こ、こ、舉丸が・・・タマが・・・」

「しょうが無いわね。

セシル。

返事もできないマゾには、一番嫌がるお仕置きが待っていることを教えてあげましょう」

「じゃあ、真弓子も来いよ」

「うん。いいよ」

これだと主導権があたしじゃなくて、セシルになっちゃう。

・・・まあ、いいか。

今回はセシルに任せましょ♥

あたしはセシルの車に乗って、リンはトランクの中。

ぶっ飛ばして向かったのは、某お嬢様大学の女子寮。

生粋のお嬢様じゃないと入れない大学っていうのはあり得ないわ。

経営的にね。

でも、寮は違うの。

親がお金持ちの2代目3代目ぐらいじゃ入れない。

最低でも5代6代目のボンボンの娘じゃないと、審査に通らないのよ。

こうして敷居を高くしておくことで、大学は寮に入るお嬢様の親から超高額の寄付金を手に入れられるのよ。

なんでこんなこと知ってるかって？

あたしがこの寮の出身者だからよ。

あたしがここに住む学生をあえて「お嬢様」なんて呼ぶ意味分かってくれるかしら？

でも、男って本当に不思議ね。

女のあたしには理解できないわ。

そんなお嬢様連中に見られた方が、普通の人に見られるよりも恥ずかしいっていう感情が・・・。

金持ちも普通の人も同じようにリンを辱めてくれると思うけど・・・。

男はそうは思わないのね・・・。

「おらっ！

そこに四つん這いになれよ。

ケツを上げてな！」

「リン♥

お返事できないなら、何時間でもやらせるわよ」

あたしとセシルはリンをトランクから引きずり出すと、寮の出口の前。

アスファルトの上で、いつかリンにさせた『NTRマソ』のお尻のタトゥーがよく見える四つん這いポーズを命令したの。

四つん這いといっても足は伸ばして、できるだけお尻を高くく上げさせるのよ。

その方が『NTRマソ』の文字が見やすいでしょう？

そうするとね？

リンの場合、股の間にあるはずの睾丸が無いっていうのも見えちゃうのよ。

もちろんリンは股の間から、後ろで眺めてくださるお嬢様に笑顔で御礼を言うようにって命令はしておくわよ。

そうすると・・・すぐにお嬢様たちは集まってきたわ。
ワラワラ寮から出てきてね。

キャツキャツ、キャツキャツって騒ぎ立てるのよ。

リンはもう逃げることも出来ないみたいだったわ。

身体に力が入らなくて、大切なところを隠すことも出来ない・・・そのくらい恥ずかしかったのね。

特にリンは晒し者にされることが苦手っていうのも或るだろうけど、朝起きたら睾丸が無くなってるショックのすぐ後に、そのオマタを見ず知らずの・・・それも明らかにお嬢様な女子大生たちに囲まれて見られたら・・・それは心のダメージは相当に大きいわね。

しかも、『NTRマン』もタトゥーも当然見られちゃう。

「きゃあ、本当にマゾだあ！」

「見て見て！ チ○コ超小さいし、睾丸付いてない（笑）」

「うわあ・・・無いわあ・・・」

「リン♡」

笑顔でしょ！

笑顔、笑顔っ！」

「は・・・はひひひひっ!!!!!!」

でも考えてみれば、当然のお仕置きよね。

マゾのくせに。

しかも、『いかなる肉体改造も受け入れる』って言うておいて睾丸取ったくらいで、話もできないくらいに泣く？

それもこんなに愛してあげてるあたしやセシルの前で・・・。

そういうマゾには一番嫌がるお仕置きをガツツリやらせて、心が崩壊するくらいの罰が必要よね。

うん。

セシルは間違っていないわ。

リンが悪い。

あたしがそんな事を考えて、ため息を一つつくとお嬢様の一人があたしに話しかけてきてね？

「このマゾの女御主人様ですか？」

って聞くのよ。

「ええ。そうよ。マゾが聞き分けがないからお仕置きに連れてきたの」

「わあ♡ じゃあ、じゃあそっちの男性は？」

「彼氏よ」

「じゃあ！　じゃあっ！　このマゾはカッブル奴隷なんですか？」

「カッブル奴隷は最初からカッブルに仕える事になったマゾでしょう？」

リンはあたしの夫でもあるから、寝取られマゾね♥」

「きゃあ♥　素敵♥」

「あの、あのっ！　舉丸とか取っちゃったんですか？」

「そうよ。マゾが射精するなんてあり得ないでしょ？」

「っていうか必要無いじゃない？」

「すごい♥」

あたしの後輩たち（と言ってもこの娘たちは、あたしがOBだなんて思いもしないでしょうけど・・・）は、じーっと可愛い顔でリンのお股、つまりピンク色の柔らかいケツマ〇コとタトウ入りのお尻と、舉丸の無い綺麗なマゾチ〇コを見て、どういう構造になっているかとかしつかり観察していたわ。

「リン！」

奴隷誓約書の重要箇所を暗唱してみろ！」

セシルの一言にリンはビクッて顔を強張らせて目を閉じた後、あわあわと口を開きながら言ったわ。

涙混じりの声でね。

「ひ・・・っ・・・わたくしはあ・・・ご主人さまの・・・ひっく・・・」

「あゝ？　何を言ってるか分からないぞ？」

せつかく皆さんに見てもらえてるんだっ！

しつかり話さないと、このお仕置き・・・何時間でもさせ続けるぞっ！」

「ひいひい。」

ひ、ひとつうう・・・わ、わ、わ、わたくしはあ・・・ご、ご、御主人様の望まれる

う・・・」

「ほら、見ろよ。」

あそこ。

あんなにチ〇コが縮こまっているだろう？

あれはマゾが怯えてる証拠だ。

君たちが怖いのださ」

「えゝ♥　本当ですかゝ♥」

セシルったら本当に酷い男よね。

リンが精一杯、奴隷誓約書を暗唱しようとしているのに、隣で見ていた女子大生にてリンを指さして、レクチャーまでしているのよ？

「しかも、ほら。」

よく見てご覧。

舉丸が無いだろう？

ああしておくことで、貞操帯がなくてもオナニーもセックスも出来ない身体にしてあるんだ。

マゾはどこで発情してしまうか分からないからな」

「きゃ♥ 主人って大変ですね♥」

「何。キミもマゾを飼えば、すぐに慣れるさ」

「うふふふ♥ 頑張りますう♥」

「いか・・・いかなる肉体改造も・・・ひっく・・・か、か、甘受することをお・・・甘受することをお・・・ち、誓います・・・」

「リン。最後の部分、声が小さい。最初っからやり直しな」

「リン♥

セシルの言う通りよ。

出来るまで何時間でもやらせるわよ？

それに・・・皆さんにどうしてあんなには、睾丸が無いのか、タトゥーが彫られているのか・・・どうしてここに連れて来られたのかちゃんと自分から説明なさい。

皆さんが分かるように丁寧にわかりやすくお話するのよっ！」

「あひいっ！ あひいっ！ そんな・・・そんなこと恥ずかしくて・・・」

「リン♥

笑顔はどうしたのかなあ？」

あたしがリンにそう言くと、（そんなことを期待したわけじゃないんだけど）お嬢様たちは笑顔コールを始めたの。

「え・が・おっ！ え・が・おっ！ え・が・おっ！
ってね。」

人間なんでもやれば出来るはずよ。

・・・。

いえ、失礼。

言葉を間違えたわ。

マゾたるものなんでも、命令されたら何でも実行すべきよね。

それがマゾたる男の義務だわ。



リンは精一杯笑顔を作っていたけど、どうしても涙混じりの声が治らなくてね。
奴隷誓約書が言えないでいたの。

あたしもセシルも、そしてお嬢様たちもがっかり。

マゾとして一番の罪は御主人様や女御主人様、それに観衆がいる場合はその人達にがっかりさせてしまうことだと思うわ。

失望と言った方が正しいかしらね？

マゾは主人を喜ばすことが生きる唯一の価値であって、その逆を行うなんてあり得ないでしょう？

だから追加で罰を与えることにしたの。

四つん這いのままで彼のすぐ横に、

『尻叩き奴隷。』

お好きな回数、奴隷の尻をお叩き下さい。

マゾですので遠慮は不要でございます』

っていう張り紙と

『こちらのマゾ奴隷は人間の言葉を話せません。

ですので本人の奴隷誓約書を開示しておきます』

って書いた張り紙を貼っておいたの。

それから、

「このまま、あたしたちが迎えに来るまでここにいなさい。

分かったわね？

これ以上言うことを聞けないのなら、もつと酷い調教をするからそのつもりでいなさい！」

「い！」

ってリンには釘を刺しておいたわ。

「わがりましたぁ・・・おんなごじゅんさまぁ・・・」

「何言ってるか分からないわね。」

戻ってくるまでにその口も治しておきなさいっ！」

って言ったら、リンはコクコク頷いてから「もうじわけありません」って謝罪していたわね。

あたしとセシルが張り紙を貼って、リンを置いたまま食事に出ようと車に乗った時よ。

あたしに色々と質問していたお嬢様がちよこちよこ寄ってきてね。

「何時頃戻りますか？ あのお嬢様、ちよっとお貸しいただければと思っって・・・」

って聞いてくるの。

あたしとセシルは顔を見合わせてから、

「迎えに来るのは、夜よ。夕方までに元に、つまりそこに今のままで戻しておいてくれれ

ばそれで良いわ」
って返事をしたの。

その後？

あたしとセシルはお昼はイタリアン。夜はお寿司。

ちよつとしたお買い物に出かけたら、あつという間に夜だったわ。

男と女のデートのはずだけど、なんだか女子大生の頃に戻ったみたいでちよつと楽しかったわね。

多分セシルもそれを感じていたはずよ。

リンは知らないだろうけど・・・。

リン？

ああ、迎えに行ったらお尻を真っ赤に腫らしていたわ。

夜なのに、街灯の明かりでもはっきりと分かるくらいにお尻が真っ赤に腫れ上がっていたの。

あたしの見立てでは、ムチじゃなくてスパンキングパドルとケインね。

あたしがいた頃からこの寮は門限が厳しくて、ちよつとでもオーバーしたら、帰ってき
た時にお尻を叩かれるのよ。

寮母さんにね。

あのパドルとケインで、リンは徹底的に叩かれたみたい。

そうね。

3000から4000発連続して叩かれたってところかな？

あたしとセシルが迎えに来たと分かった途端、リンは綺麗に三つ指を突いて土下座した
わ。

それからいつもの声で

「本日は取り乱したりして申し訳ありませんでした。お仕置き、心から身に沁みましたの
で、本日からどんなことがあろうとお二人にご迷惑をかけず、またどんなことがあろう
と心からお仕えすることを忘れずにご奉仕いたします。」

ですので、どうか御主人様、女御主人様のお側にいさせて下さい」

って言うから、あたしとセシル二人で頭を踏んで思いつきり体重をかけてみたの。

いつもなら全体重をかける前にリンは声を漏らすんだけど（ぐう）とか「痛い！」とか
か・・・、今日は全体重が乗っていると言っても過言ではないくらいに体重をかけたけど
ちゃんと最後まで我慢できたわ。

だからあたしたちは許すことにしたの。
これからはもう少し良い子でいてね♥
リン♥



あたしは甘いところがあると思うわ。

特にリンに対しては甘いというか、すぐに許しちゃう癖がある。

自分でも分かっているのよ？

もつと厳しく『嬖』をするべきだって・・・。

でもどうしても『夫』に対する『妻』の部分が出ちゃうのよね。

あたしは先日の『女子寮にて晒し者の刑』の後、リンがきちんと挨拶できたからすつかりリンを許していたのだけど、セシルはそうは思っていなかったみたいね。

「次の開発は男の要素を取り除こうぜ」

「そうね・・・えいっ！」

地下室で、あたしはリンを投げ飛ばしてからアンクルホールド。

リンをお尻の下に敷きながら、セシルの言葉に曖昧な返事をしたの。

だってセシルが何を言いたいのか具体的に分からなかったからね。

「リン♡」

少しは抵抗しても良いのよ。

もちろん100倍返しのお仕置き付きだけど♡」

「ぐっ！ ぐっ！

あ、お・・・おお・・・」

「なあに？

また人間の言葉を忘れちゃった？

また女子寮に逝きたいのかなあ？」

「ちっ！ 違いますっ！

抵抗だなんてそんな・・・わたしはお二人のサンドバックマゾであり、マゾメイドであり、タマ無しマゾ奴隷です。とても真弓子様に手を出すなんて・・・ぐっ！！！！」

「ふくん？

あたしが手を出しても良いって言ってあげてんのに拒否するの？」

「い・・・いえ・・・そんな・・・でも、この体勢じゃ・・・何も出来ないし・・・」

「あら？

じゃあ何？

マゾメイドで、タマ無しマゾ奴隷でサンドバック奴隷のリンは女御主人様に「どけ！」

って言いたいの？」

「い・・・いえっ！ そういうわけじゃ！」

「生意気♡

そんなマゾにはこうだぞ。

えいっ！」

あたしは思いっきりリンの、睾丸を取ったら前よりもさらに貧相になったマゾチ○コを掴んで、引きちぎるように腕を振り回す。

それから、思いっきりお尻に体重をかけるの。

リンは、

「ぎひいっ！ 千切れるううう！ 千切れるうううっ！」

って言って喚くから趣味の時間の後は、喚いた罰として『女子大生式尻叩きの刑』にしたわ。

『女子大生式尻叩きの刑』っていうのはね。

リンを例の四つん這いポーズにさせて、スバンキングパドルとケインをあたしとセシルで交互にリンのお尻にぶつけるの。

リンはこれが思いの外、応えるみたい。

本人に言わせると、

「お尻叩きは女の子・・・特に子供のような扱いがものすごく恥ずかしくて、心が痛いです」

だって(笑)。

だからかな？

だからセシルの改造計画を詳しく聞いた時に賛成したのは・・・。

セシルの計画はこうよ。

まずリンに豊胸手術を施して、おっぱいをつけようって言いつけたの。

それから顔も少し整形したわ。

女の子っぽく、可愛くね。

つまり準『女の子』にしちやおうってわけ。

この頃になると、リンもおとなしく手術を言われたとおりに受けるようになっていたわ。黙っていても、自分からやるというか・・・。

あたしはそういうところを可愛いと思うのだけれども、本人は怖かったみたい。

でも怖いと感じると勃起しちゃうところとか、身体は正直なんだなって感じ。

医者の方に言わせれば、顔の整形手術中に勃起した人は初めてだって(笑)。

それからね？

身体もこんがり焼いてもらったわ。

安っぽいブリーチで脱色した茶髪に、小麦色の肌の女の子って馬鹿っぽさが際立って良いわよね。

顔に「馬鹿にして下さい。馬鹿なんです」って書いてあるみたいで♥

だから、リンもそうしたわ。

前回の丸手術の時よりも、いい子に出来たからご褒美。

今まで家の仕事をする時のリンは全裸が制服だったけど、改造手術が終わって黒ギヤル風マゾになったリンには、超ミニスカメイド服を着せてあげる事にしたの。

どんなに頑張ってもお尻から、可愛いフリルパンティーが見えちゃってるんだけどね(笑)。

パンティーだつてきちんと選び抜いた物を履かせているわ。

セシルの意見でキヤラクター入りのモコモコ女児用パンティー。

あたしの意見で、ローレグ紐パン。

もちろんフロントには、可愛いリボン付きよ♥

基本この2種類しか履かせないわ。

毎朝、ノーパンであたしとセシルの朝食の給仕をさせた後、土下座で女児パンティーを履くお願いをさせるの。

これがあたしはとてもお気に入り。

だつてセシルとあたしは夫婦みたいにキスしたり、お互いの服装をチェックして裾を直したりしてるのに、部屋の端っこで本物マゾチ○ポ付きの黒ギヤルがパンティー履かせて欲しくて土下座してるのよ？

楽しくない方がどうかしてるわ。

「じゃあ今日は、キヤラパンな？」

「えゝ。それじゃあ可哀想よ。」

リンだつてローレグの、お尻が上半分見えるタイプのパンティーが好きよね？」

つて、ちよつとした言葉いじめをするの。

すると本当の女の子みたいに顔を赤くするのよ。

顔が女っぽくなっただけで、表情が女の子になるの。

元々マゾって性的にも『受け』だし、そういう傾向があるのかもね。

手術の影響で色々とリンも辛かったみたいだったから、地下室の趣味は少しの間お休みしていたわ。

でも、それも3ヶ月くらいかしらね。

今の身体に慣れてきたみたいで、リンの方から

「今まで通り、サンドバックマゾとしてもお使いくださいませ」

つて言ってきたから、そっちの趣味も復活したわ。

その時、あたし疑問に思ったからリンに聞いたの。

「どうして、趣味を復活してくれなんて言うの？」

「言わなければこのままあんな趣味無くなっちゃうかもしれないのにつて。」

そうしたらね？ リンったら、

「御主人様と女御主人様はお互いに恋をされており、愛し合っておいです。それは私にも分かります。」

私は、必要とされたいのです。

要らない仔だと思われたくないのです。

ただ見せつけられるだけの日々であっても、見せつけられているというポジションが欲しいのです。

必要とされたいのです」

って答えたの。

あたしはその答えにきゅん♥ってなったわ。

こういう時のマゾの言葉って、すごくそのものがあるし、忘れたくない心地良い胸の痛みがあるのよね。

特に『要らない仔』っていうのが気に入ったわ。

それから女の子としての調教も始めたわ。

具体的に言うと、セシルのおち○ちんを型取りして作ったパイプをリンに渡して毎日フェラ練習をさせたの。

・・・女の顔だからかしらね。

リンのフェラ顔はあたしと思うにはあまり可愛いとは思わなかったわ。

前の男の顔の時のほうが不自然さが際立って、可愛かった。

でも、セシルは女の顔のリンの方が好きみたい。

まあ、あたしはフェラされるおち○ちんなんて無いから別に良いけど・・・。

それから毎日アナル拡張もしたわね。

これは理由があるんだけどリンには内緒にしていたわ。

まずはセシルのおち○ポパイブがアナルに入って、ズコズコピストン出来る様になるまで、広げるのが目標。

最初は歯ブラシみたいに細いものから始めたわ。

ああ、そうそう。

マゾアナルに歯ブラシはおすすめよ。

それも御主人様や女御主人様の使い古した、先の広がった奴ね。

あたしやセシルは電動音波歯ブラシ愛用者だから、余計にキツかったでしょうね。

アナルに差し込んだら、スイッチを入れるの。

「あぶううううう!!!」

リンったら、歯ブラシはアナルの中で振動しているのに、なぜか奥歯がガクガクつてなるのよ？

震えている時になるみたいに・・・、でももっと激しいかしらね？

アナルの中の振動がそのまま顎が震えている感じよ。
それが可笑しいの。

だから、スイッチを入れたままアナルの中の、いろいろなところをブラシで撫でてあげるの。

するとね？

決まって気持ちいい部分があるみたいでそこを突つつくと

「ふああ〜」

って気持ち良さそうな声を上げるの。

もちろん『痛い』と『気持ち良い』が混ざっている感じの痛みみたいだけどね。

そのままおしっこ漏らしちゃったことだってあるのよ♥

もちろんおしっこ漏らした時は床の舐め掃除をさせたけどね。

ああ、あの時はセシルがそれだけじゃ許してくれなくて、『女子大生式尻叩きの刑』もしたかも。

あたしとセシルのお陰でリンはみるみるアナルが広がっていったわ。

ビール瓶もアナルに入れたまま、持ち上げられるまでになったからね。

もちろんビール瓶は、中身が入ったまま♥

アナルの力だけで持ち上げるのは、相当に重いはずだけどリンは踏ん張って、必死で持ち上げていたわ。

だからこの日以降、あたしとセシルのセックス中リンはアナルにビール瓶をアナルに入れて持ち上げさせたまま、部屋の端っこに立たせておくことにしたの。

あたしたちがねっとりキスをしている時も、セシルがあたしのマ○コの肉壁をチ○コでえぐっている時も、リンはアナルでビール瓶を持ち上げてきゅんって泣いているのよ。

ガンガン腰を振って、あたしの中にセシルの精液がベッチョリ吐き出されている時も、あたしの愛液がセシルのチ○コに絡みついて、艶めかしくデカっている時も、リンはアナルに力を込めてビール瓶を持ち上げているの。

最初の頃はビールが沸き上がってきて、リンも酔っ払っちゃうからアナルが緩むのよ。
緩むと落っこしちゃうでしょ？

そうになったら、お仕置きとして朝まで全裸マラソン。

(首輪にアイフォンを付けておけば、GPS履歴が残るからどのくらい走ったか分かるから便利よ♥)

でも2、3ヶ月したらそれも無くなったわね。

あたしたちの2時間くらいのセックス中は落とさず、ケツマンコでビール瓶を持ち上げたまままでいられるようになったもの。

もちろん最後の方はガクガク震えているけど、あたしとしては、リンのケツマ○コの『女子力』が上がったみたいで、何よりよ♥

そういう生活が続いているとね。

自分たちのセックスが世間でどの程度のレベルなのか知りたくなってくるのよ。

特にリンがどのくらいのマゾで、どのくらいのレベルのセックスが出来て、世間からどう思われるのか。

「じゃあ、試してみようぜ」

「どうやって？」

「俺の知り合いがやってる乱交パーティーに連れて行こうぜ」

「乱交パーティー？」

「そ。乱交パーティー。」

「しかも、マゾ歓迎の『Sの夜』があるんだ」

「何よ。『Sの夜』って」

「あんな。」

正直乱交パーティーって寝取りたがる方の男がどうしても過剰供給になるんだ。

そういうところに来る女も、どっちかって言うと『S』の方が多いしな。

だから、マゾは歓迎されるんだよ。

そして陵辱される。

男だらうが、女だらうがな。

リンにはちよūd良いだろう？」

「うん。」

「そうねえ・・・。」

でもそういう所ってあたしやセシルは見ているだけでコトが済むのかしら？」

「いや？」

「いやって・・・。」

「じゃああたしやセシルも参加するの？」

「もちろん」

「・・・。」

正直これでも綺麗に生きてきたつもりよ。

決してヤリマンだったわけじゃないわ。

でも・・・。

確かに見てみたい。

知りたい。

自分のセックスってどうなのか。

そういうところのセックスってどうなのか。

そういう人達が見るリンやあたし、セシルはどうなのか・・・。

何よりも・・・。

何よりも見知らぬ男に犯されるあたしを見て、リンやセシルはどう思うのか。

どう反応するのか・・・。
知りたい！

ものすごく知りたいっ！

「・・・決まりだな」

あたしの表情を見ていたセシルはニヤツと笑ってあたしの頭を撫でたわ。

あたしはそれを手で払って

「子供扱いしないで！」

そう喚いた。

子供みたいに・・・ね。

心の中の弱い部分に土足で踏み込まれた気がして、セシルにイラッとしていたはずなのに・・・、あたしったら気がついていたら、リンを怒鳴るように呼びつけて、足の指を舐めさせて奉仕させていたわ。

リンが足の親指をしゃぶってくれと、不思議と落ち着くのよ。

多分、喫煙者のタバコと同じね。

しつかりじっくりしゃぶらせたら、リンのミニスカメイドスカートをめくって、パンテイーをチェックするの。

勃起してるかどうか。

紐パンだとおち○ちんの先つちよがピョコンって出てきて可愛いし、キャラパンだとモッコリするから笑えるのよ。

この時はリンの頬を思いつきりピンタしたけど・・・。

「こ、・・・このままの格好で行くんですか？」

リンは珍しく抗議とも取れるような質問をあたしたちにぶつけてきたから、あたしはぶつきらほうに

「そうよ。さっさとしなさい」

って、そう答えたわ。

多分あたしはあたしで緊張していたのと、セシルの余裕っぷりに腹が立っていたのかもしれないわね。

リンは仕方なく全裸に蛍光ピンクの首輪で、車のトランクの中に乗り込んだの。

これが『Sの夜』のマゾの義務らしいわ。

黒ギャルになったリンは、トランクの中に入った時点で勃起していたわね。
自分でもよく分かっていたみたい。

これから妻を不特定多数の人に寝取られるんだって。

そして自分はそういう趣味の人達におもちゃとして犯されるだって。

だから勃起しちゃう。

心の中を大きく占める『怖さ』とは裏腹にね。

会場は雑居ビルで、普段なら絶対に入らないような汚いビルだったわ。

汚いと言い切って良いと思うのは、雰囲気だけじゃなくて、壁の汚さとか悪臭とかが凄かったから。

正直、セシルがこういうところを知っている事自体意外だったし、それが嫌でもあったわ。

なんか見たくない彼氏の、悪いお友達を見てしまった気分よ。でもね。

全裸のリンを車から出しちゃった以上、進むしか無いじゃない。あたしだってちょっと嫌だったわよ。

この、セシルに何もかもコントロールされている感じ・・・。ドアだって汚かったわ。

ステンレス丸出しのサビだらけ。

しかも、セシルが会員ナンバーを読み上げないと開けてもらえないの。

中はものすごいお香の香りが漂っていてね。

ドアを開けた途端、モワッって濃い香りが鼻につくの。

セシルはそれが当たり前みたいに部屋に入っていったから、あたしもリンもついていくしかなかった。

ドアマンの男はあたしとリンを見るなり急に、鼻の下を伸ばしていたわね。

リンはあたしの後ろで完全に怯えていたわ。

ガクガク震えているのよ。

股間と豊胸手術されて大きくなった胸を両腕で隠しながらね。

「こんにちは」

「おお、セシルじゃん。

おひさ。」

お！

約束通り連れてきたねえ。

奥さんとM男君。

聞いてるよ。」

M男くんは、夫だけどセシルに寝取られちゃったんだよね。」

ああ、これが噂の『NTRマゾ』のタトゥー？

ホントに入れてたんだ。」

可愛いね。」

・・・ラリってるのかしら？

それがあたしのこの女に対する最初の印象。

だって、目はトロンとしているし、裸でタバコふかしながらなんの遠慮もなくリンの腕を指先でなぞってる。

普通の女はそんなことしないでしょう？

いくらここが乱交パーティーの会場だからって・・・。

でもこんなあたしの感想はむしろここでは異質。

セシルもさっきのドアマンもさっさと全部脱いじやって、床に直接座ってる。

服を未だに着てるのはあたしだけ。

あたしは服を着たままでいることが逆に恥ずかしくなあって、慌てて脱いだわ。

リンはあたしの腕にぎゅってしがみついて怯えてる。

すると、乱交パーティーの主催者らしき人物が出てきて、(こいつは男で、一人だけ黒のガウンを纏っていたわ。多分ガウンの下はノーパン。全裸状態ね。すぐに参加してくるだろうし・・・) 延々と始まりの言葉だか、挨拶だかをしていったわ。それから全員がドアマンか主催者に参加料を払ったの。

あたしとリンの分はセシルがまとめて払ってくれたけど、主催者はリンに興味津々だったらしく、・・・というか参加者全員がやりたくて仕方がない目をしていったわ) かなりマジマジとリンを見つめていたわ。

その時になってようやく気がついたの。

マゾの証明である首輪をしているのがリンだけだって。

つまり残り全員が「S」。

ちよっとこれは想定の外だったって認めるわ。

もう一人くらいマゾがいると思っていたから。

主催者がお金を集め終わって謝辞を述べた頃かな。

あたしは裸なのに自分の体が熱いってことに気がついたの。

リンも呼吸が早くて、熱の籠った息を吐いていたわ。

最初は部屋の暖房が効かせ過ぎなんだと思った。

でも違ったの。

この部屋に入るとき香ったあのお香。

あのお香のせいよ。

だって暑いだけじゃあ、視界がぼやけたりしないでしょう？

あたしは後悔したわ。

ここに来たことに。

でももうダメ。

こんな意識じゃ逃げ切れない。

車なんてこんな状態で運転したら、100パー事故るわ。

それにリンもいる。

リンは軽いけど、それでも男だから背負って逃げるのは厳しい。

だとしたら乗り切るしか無いわ。

ここにいる連中だって命までは取らないでしょう？

だから・・・。

やって、やって、やりまくる。

覚悟を決めなくちゃ・・・。

トロンとした状態でなんとなしに、自分の股間を見たらね。

ぎよつとして、すぐに周囲にバレてないか確認しちゃった。

おしっこ漏らしたんじゃないかしらつくづくらいに愛液が垂れていたのよ。

オマンコからドロドロ垂れ流していたの。

それはリンも同じみたいで、フル勃起。

それも、年に数回しか見ないような、120パーセントフル勃起でおち○ちんをプルプル震わせていたわ。

我慢汁垂らしながら、ね。

・・・さっきのラリッてる女はこのお香のせいであんなトロンとした目をしていたのね・・・。

あたしは妙な納得とともに自分も同じようになってるって分かった。

主催者の長すぎる「俺ってすごいだろ？」スピーチの中でリンの『NTRマン』のタトゥーの話が上がっていたように感じたけど、それも上手に認識できない。

酔って意識を失う直前だって、こんなことはなかったのに・・・。

気がついたら・・・。

あたしは知らない男のチ○ポを握りこんで、しゃぶっていたわ。

泣きながら、アナルを犯すのは止めて欲しいと訴えるリンの横でね。

誰かがあたしのアナルを指でほじって、それはとてもとても痛かったけども・・・。

痛いはずなのに声も出さずに、しゃぶっているの。

しゃぶりたいくもないどこかの誰かの、チ○ポを・・・。

マ○コを舐められたって、平気よ。

普段なら、セシルだろうがリンだろうがマ○コに舌が触れただけで、声を上げてしまうあたしだけ・・・。

今は、好きなだけ舐めれば？　って感じ・・・。

「いやあ、耐性が無さすぎるんじゃない？」

大丈夫う？

セシル」

「平気平気。

気にせずやりたいようにやれよ」

遠くでセシルの声がする。

すくむかつくことを言われた気がするんだけど、怒る気さえ起こらない。
というか怒らないとって思おうとする時点でダメよね・・・。

リンはあたしの横から絶対に移動したくなかったらしく、少しでも離れるとピーピー大
声をあげて泣き喚いでいたみたい。

ごつい身体の男・・・多分あれはあのドアマンね。

あいつに抱え込まれて移動させられそうになったら、噛み付いたみたいだったね。

ダメなリンね・・・。

あんなことをしたらあとでセシルにお仕置きされちゃうわよ・・・。

でもそのお蔭であたしの横で犯されることになったみたい。

あたしの横で

「はっ、はっ、はっ」

って息を吐きながら、涙をこぼしていたわ。

あの調子じゃあ、相当に痛いね。

お尻を犯されてるみたいだから、例のドアマンも痛いだろうに・・・。

ビール瓶を持ち上げるリンのケツマンコよ？

アハハ。

ザマアミロ。

デモ、リンモナイテルミタイダッタワネ・・・。

ア、セシルガリンニナニカイッテル・・・。

ソナドナラナクテモ、シツケガイキトドイテルリンヨ？

イワレタトオリニスルノニ・・・。

アア・・・リンガシヤシンヲトラレテル・・・。

キツコウイウシヤシンヲキヤクヨセニツカウキナノネ・・・。

リンハイヨイヨ、ネットノセカイニマデサラサレルンダワ・・・。

あたしは自分でも何を考えているのか理解できない。

自分の考えが頭の中に流れるだけ・・・。

でもあたしは・・・。

あたしは・・・。

生まれて初めて・・・。

知らない男に・・・。

・・・犯された。

自分でもどうしていいか分からないくらいに・・・。

グッチョグッチョに・・・。

ごめんなさい。

リン。

言い訳するつもりはないのだけでも・・・。

あたし貴方をここまで晒したかった訳じゃなかったのよ。

それから、軽い女になってごめんなさい。

セシルだけならともかく・・・。

恋した相手以外の、今日初めて会った男にまで中出しされる女御主人様なんて嫌よね？

・・・ごめんね。

でも気持良かったの。

隠さないで言うね？

気持ち良くて何回も逝ったの。

貴方がいくら舐めても逝かせられないあたしは・・・。

何回も、何回も。

見知らぬ男の、ただの肉欲だけのチ○ポに負けちゃったの・・・。

・・・ごめんね。



あたしはあの悪夢のような乱交パーティーから変わったわ。

明らかに今までよりも、物事に踏み出すのに躊躇が無くなったもの。

リンも変わったわ。

ただしリンはあたしと逆の反応。

何事に対しても、最初の一步を踏み出さなくなってしまったの。

それはちよつと困ったことだったわ。

億劫というよりも臆病になってしまったのよ。

あたしとセシルのいうことはちゃんと聞くし、家の仕事もしてくれるけど……。

でも自分から何かを行動しようって気は無くなってしまうみたい……。

「じゃあ、気晴らしに外にでも連れ出すか？」

「……そうね。買い物にでも連れて行けば気も晴れるかもね」

あたしはセシルの提案に乗ることにしたわ。

あたしはリンを怯えさせることは大好きだけど、そのトリガーというかリンが怯える理由はいつもあたしであつて欲しいの。

普段から怯えるようじゃ意味が無いの。

このままだとアイツの事、捨てたくなるわ。

外に連れ出してお買い物でもさせて……。

それで治らなかつたら、捨てようかな……。

「そろそろ捨て時だと思わない？」

あたしの問いにセシルは

「ふっ」

って笑ったけど何も答えなかったわ。

多分、リンの処分に關して關与したくないっていう意志の、表明のつもりなんだろうね。

リンはあたしとセシルの会話を部屋の端っこで、メイド服のまま聞いていたわ。

もちろん、『聞かせた』のよ。

このままだと捨てるからね？　って意味だね。

こういう時のリンの顔って、ありありと恐怖の色が浮かぶのよ。

乱交パーティーみたいなところにも売り飛ばされるとでも思っているんでしょね。

それがなんとも可笑しい。可愛い。愛おしい。

あたしはメイド服を着せたままのリンを、車のトランクに積み込んでセシルと街に出る。今日は晴れているし、日曜だから人も多いわね。

メイド服のままのリンにあたしの買った商品を持たせて歩くの。

あたしはとても楽しいわよ。

あたしが試着して、セシルがあたしの試着姿を褒めてくれる時も店員がリンをコソコソうわさ話しているのが分かるしね。

女特有の、トゲと嫌味のあるコソコソ話が聞こえると、リンが縮こまっていくのが分かるの。

それはそうよね。

こんなお金持ちしか来ないような下着ショップに、いかにもっていう男女にくつついて黒ギャルメイドがいるんだもの。

しかも荷物持ちさせられているし・・・。

安っぽいブリーチで脱色された髪に、パンツが見えてるハイパーミニのメイド服。

小麦色に焼けた肌に、大きすぎるほど膨れたおっぱい。

スカートの前部分はこんもり盛り上がった勃起テント。

顔は女なのに、声は男のまま。

「・・・何あれ」

って噂されて当然よね♥

「どう？ セシル♥」

あたしは桜色でお揃いのブラとパンティーを試着して、セシルの前に立つ。

「ああ、綺麗だよ」

ソファに深めに座ったセシルは、軽くあたしを見上げながらそう言ったわ。

人間同士でのつながりこそが人間そのものののだとすれば、セシルのあたしに対する態度はあたしが人間として大切にされていることの証明であり、あたしという人間性そのものを表しているわ。

ちらつとあたしがリンを見ると、リンはまだ縮こまったまま。

これがリンの人間そのもの。

周囲に隠し切れないマゾ性。

蔑む他人からの痛い視線こそがリンの人間そのもの。

ああ、そうか。

リンは普通の人にマゾは、男として愛されないと知っていたのね。

昔からずっと、男である以前にマゾだもんね。

「リンもなにか買う？」

あたしは何気なく、リンに尋ねる。

優しさと言うよりも、立場が上の女が下の女に余裕を見せるようにね。

で、買ってあげたのがこれ。

かぼちゃみたいに膨らんだもこもこ女兒パンツ。

店員もノリノリで用意してくれたわよ。

常時もっこりしているパンツの前部分にはピンクのウサギちゃんがプリントされているの。

せっかくだからメイド服以外の服も買ってあげるわね♥

「ふえええっ！！！！」

嫌だよお。

こんな格好嫌だよおおっ！！」

リンが喚いているけど気にしない。

いえ、それは嘘ね。

とっても気になる。

もつと聞かせて欲しい。

だからリンが最も嫌がるように、あたしとセシルはリンの手を引く。

まるで子供の手を引く両親のように・・・。

リンには吊りスカートの・・・、小さな子が着るような服を買ってあげたわ。シャツとリボンはメイド服の物を流用したけどね。

いくらリンが小さいからって、子供用の吊りスカートはかなり無理があるわ。

そもそもスカートがおへそぐらいまでの長さしか無いもの。

そんな状況で、かなり良い服を着たカップルに手を引かれて、人通りの多い街を歩くの。

「寝取られ・・・マゾ♥」

あたしはリンの耳元で囁く。

リンが可愛く悶えるように。

もつと・・・、もつと恥ずかしい思いをするように。

そしてあたしとセシルにマゾとしてのご奉仕するしかない、男としての価値の無い人間だという自己認識が心の底から満たされるように・・・。

「こんな格好をさせられて・・・。

まだ恥ずかしいか思ってるの？
生意気よ♥」

リンの男としての最後の防波堤は、大多数に自分のマゾヒズムを知られていないということ。

だから晒されることに対して極度に、恐怖感と怯えを持つ。
ならば・・・。

「ここでおしっこ漏らしなさい。

そうしたら、少しは見直すかも・・・♥」

あたしはリンの耳元でもう一度囁く。

セシルはそれを聞いて、「ふっ」と笑ったわ。

『そんなワケ無いだろ？』

という意味と、

『でもまあ、リンは奴隷だから、そういう言葉にすぎるのか。

情けない奴だな』

っていう蔑み。

そういう物を含んでいることは、あたしもリンも明確に把握できる。

でも、リンは逆らえない。

だって、今でもあたしが好きだから。

マゾとしても。

男としても。

人間としても。

そしてリンがあたしに差し出せるものはマゾとしての自分だけ。

男としても人間としても、あたしが選んだのはセシルだから。

「誓約書に書かれている

『一、私儀は、ご主人様が選ばれた御方に対して、ご主人様と同様にご奉仕し、お仕えることを誓います』

の真の意図は、

『男としても人間としても女御主人様に見合う男であります』

という決意の表明。

それが出来ないマゾは女を寝取られても、仕方がないの。

他に男を作られても仕方がないの。

だから泣きなさい。

泣いて良いのよ。

価値の無いニンゲンだもの。

道具としてのマゾ。

それが貴方の唯一の価値。

さ。

そろそろ言われたとおりにしたら？

おしっこ時間よ。

今、ここで。

おしっこを漏らしながら泣きなさい。

糞丸の無いおチ○ポから、びちゃびちゃおしっこを漏らすのよ」

あたしはリンのお腹をギュッと押す。

リンは「ぐ！」ってうめき声を上げた後・・・。

そのままの格好でおしっこを漏らしたわ。

言いつけ通りにね。

「あはああつ！

嫌っ！

見ないでっ！

見ないでえっ！」

「おいおい。こんなトコロでお漏らしかよ」

「何あれ。変態？ マジキモイんだけど」

「うわあ。最悪う」

「あれって男かな？ 女かな？」

「どっちでも良くない？」

あの格好の時点で男としては終わってるし。

女としてもアウトでしょ」

そんな声がリンを包んで・・・。

リンは盛大に泣いたわ。

ヒグヒグ大声で泣くの。

声をあげて、涙を頬に伝わせて・・・。

心の底から泣きながら歩いてたわ。

ちようどその時よ。

ほら。

歩行者天国って、買い物客用にベンチが歩道に置いてある所があるでしょう？あれに座ってね。

あたしはリンの手を強く引いたの。

あたしの膝の上にリンが腹ばいになるように。

リンは自分がこれから何をされるのか、もう分かっていたみたい。

そうよ。

お尻べんべん♥

今日はお尻を叩く道具を持ってきていないから特別に、あたしの手で叩いてあげるわ。

大衆監視の中での、子供扱い。

どう見ても大人なのにね。

大衆監視の中での、お尻べんべん。

見た目は黒ギルなのにね。

大衆監視の中での、お説教。

浮気相手とデートしている妻から・・・ね♥

「ほら！

お尻出しなさいっ！

こんなトコロでお漏らししてっ！

お尻べんべんよっ！

しゃきっとしなさいっ！」

あたしがリンの下着を下ろすと、周囲からは

「わっっ♥」

っていう声があがったわ。

同時に、ものすごくたくさんの携帯カメラのシャッター音。

カシヤカシヤっていうあの独特の音よ。

フラッシュ焚く人も多かったわ。

それはそうよね。

お尻には大きな文字で

『寝取られマン』

って書かれているのだから。

あたしはショーに出ている女優のような気分で、大げさに手を振り上げる。そしてリンのお尻をパンっ！って叩いたの。

痛かったわ。

リンのお尻ではなく、あたしの手がね。

肉の塊を手で叩いているんだもの。

手が痛くならないはずがないわ。

でもその痛みはリンの心の痛みの数%にも満たない。

あたしはそれを知っているから、手の痛みさえも心地良い。

気持ち良くなれる。

しかもリンのお尻の、特に『寝取られマゾ』の文字の周りが赤くなってゆくのが楽しい。

文字の周りばかりあたしが叩くもんだから、余計にタトゥーが目立つのよ♥

周りの観衆もそれを分かっている。

だからリンのお尻にカメラが向いているの。

リンの顔とお尻を両方撮るのが、普通みたいになってる。

そう遠くない時期に、あの写メはいつかの乱交パーティーの時に撮られた写真と同一人物だとバレるでしょうね。

ネットの特定班は優秀だから。

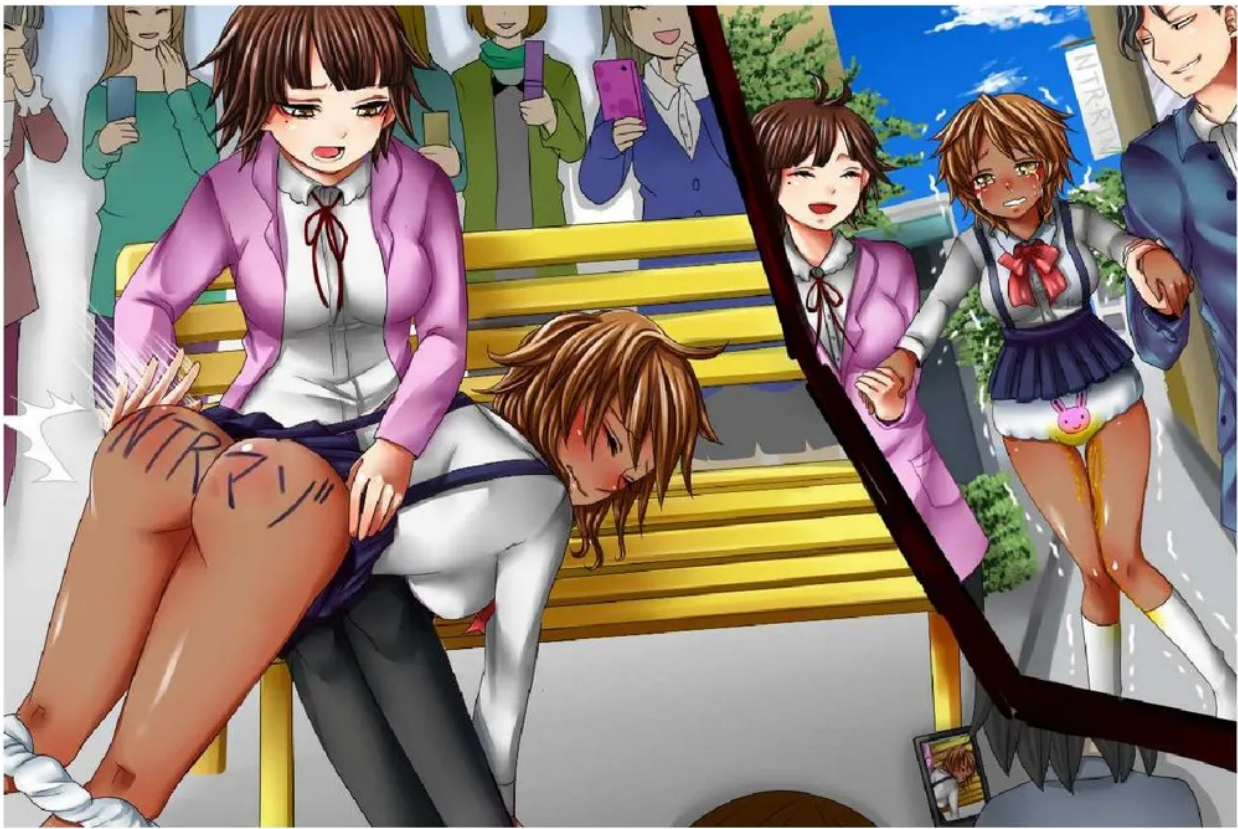
でもそれもリンにとっては嬉しい思い出になるはずよ。

一生、『ああ、寝取られマゾの・・・』って後ろ指を刺されるの。

すごく嬉しいでしょう？

あたしは嬉しいわ。

可愛い可愛いリンの、苦しみ嬉しいの。



最終章

リンとあたしとセシルの話はこれでオシマイよ。
ここまで付き合ってくれて、ありがとう。

一応後日談をお話しておくわね。

あたしは・・・エイズに感染していたの。

あの乱交パーティーの時にうつされたみたい。

道理で、物事に躊躇なく飛び込んでいけるようになるはずよね。

頭では理解していなくても、身体は理解していたみたい。

自分の死を。

・・・

じゃなきゃ、公衆の面前で黒ギャルに改造した夫のお尻なんて叩かないか・・・。

セシルはあたしよりも一足先に逝ったわ。

性的にではなく、生物的にね。

お墓はあたしの家の庭にあるの。

毎日あたしがお花を添えているのよ。

リンは、ね。

なぜか彼だけはなんの病氣も出なかったの。

いたって健康。

ふふふ。

笑えるでしょう？

彼からしたら、妻は間男にあの世にまで持っていかれちゃうのよ。

あのね？

あたしだってリンを手放したくないのよ。

とっても可愛いマゾなもの。

でもね？

まさか

「あたしが死ぬから貴方も・・・」

とは言えないの。

ちよっとそうして欲しいとリンに甘えなくなったこともあるわ。

正直今だってそう思ってる。

でも、言えないの。

リンは忠実だから必ずあたしの命令を実行するもの。

・・・だから。

タマを頼ることにしたの。

タマ。

これがあたしとリンの・・・。

偽らざる関係と調教日誌。

どうか今、貴方をお飼いになっている貴婦人の方にリンをお願いできないかしら？

タマの女御主人様。

しっかりと調教できているから、躰は最低限で問題ないはずですよ。

どうかお願いします。

あたしのリンを飼ってくださいませんか。

他では生きていけないようにあたしが、してしまったんです。

どうかお願いします。

どうかお願いします。

どうかお願いします。



(終わり)

あとがきに代えて

久しぶりのリクエスト『非』対応作品です。アイディアから一人でコトコト煮込んだ結果、内容はハードなのに軽いノリでパンパン調教するカップル御主人様とどこまでも忠誠を誓うマゾが出来上がりました。

各キャラの名前は、真弓子とタマ意外は家畜人ヤブーのキャラから名前を取りました。ヤブーの主人公、鱗一郎から「リン」。鱗一郎去勢のきっかけである「セル・ドレイバア」からセル。

これは家畜人ヤブーのような極限まで煮こまれたマゾヒズム思想を作者が欲したためです。濃い、濃厚なマゾヒズムこそが復取られマゾの本質であると思います。

普段から逆リヨナしまくり。

睾丸除去か、竿除去かを賭けて、妻と間男が主人公を狩る。

乱交パーティーで夫婦ともどもねぶられ、犯される。

現実では絶対にあり得ない程、徹底的に晒し者にされる。

ラストは妻死亡。

本編では名前さえも上がらない女性に譲渡される。

このラストはすごく悩みました。鬱ラストである以上に、崇拜すべき対象である女性が最後に笑っていないのは、マゾ小説として良くないと思ったからです。

しかし。

刺すような、痛みの残る行動こそがS女性の取るべき行動と思い、そのまま載せました。

最後に、本作の制作に関して支えてくださった4人の女性心からの感謝を記して、この話の締めとさせていただきます。存じます。

最後までお読み下さり、ありがとうございました。

☆NTTMマゾリスト

☆muram9@gmail.com

☆<http://rimaso.x.fc2.com/index.html>









